
傍“奸”者

百鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍“奸”者

【Nコード】

N9746Q

【作者名】

百鬼

【あらすじ】

世界に残る神話の数々。その中に一柱、全ての神話に登場する悪神が存在した。神話の数だけある名前。しかし、彼を指す名詞だけはどの神話でも同じもの。悪意の塊「統一呪言」^{ゲシュタルト}。最低最悪、嘘を吐かない詐欺師、人間の悪意を擬人化した神性。これはそんな彼の行動を記録したものである。 注意！ この小説は処女作です！ 亀更新で、至らない点があるかもしれないけれど、見てくれると幸いです。

第一話 悪意の塊（前書き）

はじめまして百鬼と申すものです！ この作品はさまざまなネギま二次創作作品を読み、自分も書きたい！ と思い至って書き始めたものです。プロットもないような行き当たりばったりな作品ですが、どうぞ応援よろしくおねがいします！

第一話 悪意の塊

「君の望みを言ってごらん、ボクが叶えてあげるから」

「それじゃ、オレは世界一の魔法使いになりたい！」

「——世界一、ね。わかったよそれが君の願いだね」

につこりと、男——というには幼い顔つきをしている——は、穏やかだが、どこか現実味のない気味の悪い笑みを浮かべた。これを何かにたとえることは、誰にでも出来るだろうが、きっと皆が皆、違う答えになるだろう。

そんな笑みを浮かべているが、男の目の前にいる少年にはそんなことはわからなかった。彼は、自分と同年であるほかの子供よりも少し頭の出来がよくなかったのだ。

男は、少年の頭に手を乗せる。少年はビクつくが、男は安心させるように頭をなでた。

「大丈夫、ほんの少しの時間目を瞑っていてくれればいい。痛くないしすぐ終わるよ」

少年はその言葉を聴いて、目を瞑る。本当にすぐ、少年からしたら数秒経たずにそれは終わった。

「はい、終わった。これで君は世界一の魔法使いだ。良かったね」

「本当にか！」

少年は背中に背負った木の杖を取り出した。それを構えて魔法の呪文を唱えた。

「プラクテ・ピギ・ナル“アールデスカット火よ灯れ”！！」

すると小さな火が杖の先に灯った。

「すげえ！　ちゃんと出来た！」

この呪文は、初心者用の優しい魔法であるのだが、少年——ナギ・スプリングフィールドにとって、この魔法の成功はとても大きなものだ。彼は魔力制御が苦手だ。それは、初心者魔法である“アールデスカット火よ灯れ”の呪文で、巨大な火柱が出てしまうほど。これに危機感を抱い

た父であるウェールズ魔法協会理事長にして、見習い魔法使いたちの通うメルディアナ魔法学校校長に、この呪文が制御できない限り、他の魔法を使うことを禁じられてしまった。当然、それにナギは納得せず、父に隠れて使ってしまうとも思った。しかし、それをよんでいたのか、父はナギに制御が成功しなければ他の魔法が使えなくなる呪いを施したのだ。

魔法が使えずイライラする日々。それも今日でおしまいだ。心なしか、唯でさえ多い魔力が増えている気もする。体を高揚感が包む、まるで世界の中心に自分がいるようだ。——世界の中心にいるように、何を言っている。自分はすでに、世界最強の魔法使い！ この世界に中心にいるのは、当たり前！

「おっさん！ ありがとよ！ って、いねえ！？」

ナギは、その場でくるくる回り、喜びを体で表現する。そして、自分を世界一にする協力してくれた、黒髪の男に礼を言おうと動きを止めた。しかし、そこにはすでに姿はなく、ただ1人、ナギだけが佇んでいた。

世界に飛び交う不幸の元凶。そのように言われ、悪とされる存在がこの世界の神話系統の全てに記されている。それは各神話によって名称こそ異なるが、語り継がれている詳細や、それを指す固有名詞（二つ名のようなもの）が同じであることから、学会では全てが同じ神性によるものである同一神の説が有力だ。

その、世界の敵である悪神の姿とは、この世のものとは思えない醜き姿ではなく、闇のように黒い髪に、紅く燃える瞳を持つ、まるつきり人間と同じ形をした存在だった。それは嘘を吐かない嘘吐き神様、どうでもいい事実をそれはそれは大切なことのように伝える詐欺師。名はいくつも残されていようと、その悪神を指す固有名詞はたった一つ。悪意の塊「統一呪言」^{ゲシュタルト}と彼は呼ばれていた。

「ゲシュタルトと言う名前はボク、結構気に入っているのね、今度からボクのことには『ゲシュちゃん』とでも呼んでくれよ。——とここで君は誰だい？」

ここはウェールズの山奥のさらに奥にある日の光の届かない暗い森。そこには先ほどナギに力を与えた男が立っていた。そして突然に誰かに話しかけたと思ったら、顔を斜めに傾げながら、あさつての方を向く。その燃えるように紅く、感情を一切感じない暗い瞳で、空中を眺める。

「ちっ、気付いていたのか、さすがは仮とは言え神の一柱と言ったところか」

これまた突然、空がゆがみはじめたかと思うと、そこから強い熱風が吹いた。その風は、男の一つに結んだ黒い長髪が馬の尻尾のようにならふらふらとたなびいた。

パリンと、まるでガラスの割れるような音と共に、いつそう強く風が吹く。それにもかかわらず、男は全く動じず止まったままだった。気が付くと、空中にひじまで届くだろう白銀の髪を持つ女が浮いていた。

「んー？ 神、ね。別にボクは神になったつもりなんてないのだけれど」

男は、にやにやと、一目見ただけで、普通の感性を持つ者なら嫌悪感を抱くような、気味の悪い笑みを浮かべる。現に、それを見て、宙に浮く女は眉をひそめた。

「貴様の悪行は、神話の時代から語り継がれている。貴様も世間では『人間の悪意を擬人化した神性』なぞ呼ばれている」

「ふーん、酷い言われようだね。ボクはいつも世のため、人のため、身を粉にして頑張っているのに」

「戯れ言を。貴様はいつもそう言って人を騙す」

「やだな、それじゃあボクが嘘を吐いているみたいじゃないか。ボクのこの世で一番嫌悪しているのは嘘を吐くことだ。そんなボクが

嘘を吐く訳がない」

ギリツと宙に浮く女は齒を噛み締めならした。拳は強く握りしめて、白くなっている。

「ふざけるな！ たしかに貴様は嘘を吐かないが、本当の事も言わん！ その甘い言葉に騙されて、何人もの人が不幸になった」

「おいおい、それはボクの所為じゃないだろう？

だって、ボクは人の相談に乗って、ボクに手伝えそうなら手伝って上げてただけだぜ、現にみんなお礼してくれるし」

事実、先ほどだって、ナギ・スプリングフィールドは彼に感謝していた。

「だが、人は努力しなければ、劣るだけだ！ 貴様のそれは、人を墮落させる悪魔の契約、そんなものは許されてはならない！」

「そんなの人の勝手だろう？ 与えられた力を使って幸せになれる人だっている。ほら、ボクが神話に出てのしっているだろう君。

アレの中にボクと契約して幸せになった人も出てくるだろう？ さつき力を与えた少年もそうだ。彼ならあの力を使って世界を守る英雄にだってなれる」

「しかしッ！」

「しかしもなにも、ボクはさつきから正論しか言っていないだろう？ 結局人は一番になって、そこから先を目指してがんばれるか、満足して足を止めるか、その二択にひとつだ。君の場合、前者だっただけだろう？ 先を目指しすぎて、他のことでも一番になりたがって。結局、不幸になったって言う人間は、自業自得だよ」

くるくるくると廻りながら、楽しげに語る男。にやにやと浮かぶ笑顔は三日月のよう。宙に浮く女は、どんどん顔を赤くしていき、うつむいている。周囲にはばちばちと火の粉が散っていた。「——ほら、その力。ボクのものじゃないか。やっぱり君もボクと契約した子だったんだね。それなのになんでボクを攻めるの？ 君は望んでその力を得たんだろう？」

ぐっと拳を握りしめる。宙を浮く女の体には紅蓮の炎がまとわり

つく。周囲の木々は自らに降りかかるであろう不幸を感じとったのか、ざわざわとその枝を揺らしている。風も違和感を感じたのか、ごうごうと吹き荒れる。

「わかった、今からボクはその理由を考えとするよ。きっと君はその力で一番になりたかった。炎の特性は破壊と再生。君は、人より長生きしなかったんだね、それからは不死鳥の匂いがする」

「……………まれ」

ぼうぼうと、宙を浮く女の周囲に散る火の粉が火の玉に変化する。空気は、肌を焼ききるような熱さに、その姿を歪めて地獄から逃れようとする。

「よかったね、君は一番になれた。周りの人が死んでいく中、自分には古いも、劣りも、死すらもない」

「……………だまれ、——」

その長い長い白銀の髪は、宙の炎を移して紅く煌く。髪は重力に従い地に向かっておろされている。空気が死んだのだろう、風が消えた。宙を浮く女の髪は、怪しく揺らめくこともなく静かに光を反射していた。

「君はここで初めて空しさを感じた。それと同時に罪悪感も得た。人の摂理を反るように、自分はズルをして不死身になった。周りががんばっている中、自分だけは楽をして、ただ与えられた一番に居座り続けた」

「——だまれだまれだまれ」

火の玉は二つに集まり、翼になった。その姿は美しく、幻想的で、破滅的。全てを壊すような恐怖を感じると同時に、その明るさに暖かい太陽を思いださせる。

「それを自覚した君は全てに絶望してしまったんだね。その絶望から生まれた憎しみを、自分に力を与えたボクに向けた。それで気が付いたんだ、ボクの神話に登場する哀れな英雄たちのようにボクに力を授かり不幸になってしまった存在が多くいると。だから君はそれを大義名分として、逃げ道として全てをボクにしたんだろう。さ

男はそこで区切り、ついでに体の動きを止め、燃え盛る女を空虚な瞳で見つめる。その瞳の奥には焼ける炎が写り、紅い瞳をさらに紅く燃やす。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアッ！！！！！」

ドーン！ 激しい突撃音と共に、地響きが発生した。遠くで鳥の逃げ惑う声が聞こえてくる。

何事も無かったかのように、男は炎の蛇の拘束から抜け出した。

「ガアアア！」

「だからあぶないって。森は焼けたら結構な時間、元に戻らないらしいよ」

だがそれは、あっさりと回避されてしまい、燃え盛る女は勢い殺せず、地面に突っ込んだ。再び地響き。今度はなにかが逃げていく音はしない。

燃え盛る女は立ち上がり、再び攻撃をしようとするが、立ち上がる前に男に背中を踏まれ、立つに立てなくなってしまうた。それでも、男の拘束から逃れようと、もがくが意味はなく、しばらくする

とうなるだけになってしまった。

「そう、君はおとなしくしていればいいんだ。待つてくれよ、君はボクの所為で不幸になってしまったんだね？ だったらボクが責任を取って君を終らせよう。いくら不死身とはいっても、ボクの『アイバースン傍奸者』の前でそれは無意味だ」

男の右手に周囲を燃やしている女の炎が集まっていく。まるであ
るべきところに戻ろうとする物体のように、それは極自然な風景だ
った。

「さて、それでは君とはお別れだ。来世でも仲良くできるといいね
気味の悪いハリボテの笑みを浮かべ、男は別れの挨拶をする。女
はうーうー唸っており、その目はまだ死んではいなかった。

「それじゃ、さよならだ。じゃーね——シャルロッテ」

最後に一つ、男は最低な地雷を落としていった。彼女の名前だろ
う。しかし、彼女の名前はシャルロッテではなく、リザである。彼
女の目は死んでいた。男は拳を振り下ろし、彼女の頭を軽く叩いた。
すると、彼女は炎に包まれ灰すら残さず燃え切った。

第二話 古龍・上

ここは魔法世界の北に位置する龍山山脈の奥地。ぎりぎりメセンブリーナ連合には位置しないところである。そこに、黒髪に紅い瞳を持つ男はいた。目の前には龍山山脈が、そう呼ばれる由縁である山ほど大きい古代の龍が佇んでいた。その存在感は、なるほど、現地の人が神として崇めるに足りる大きさ。龍の周囲には、凍てつく冷気が常に漂っており、それが日の光を反射して美しい光景を生み出す。

「ふふ、ようやくここまでついた。ボクは貧弱だから、ここまで来るのに一年もかかってしまったよ」

男は龍を見上げ、親しいものに語りかけるかのように言った。その顔には笑顔が浮かんでいた。

「ひさしぶりだね、■■■■」。元気にしていたかい？」

男は聞き取れない言葉で龍の名を呼んだ。龍はその言葉を聴いても、身動きをとらず、ただそこにあるだけだった。

「今日は君に頼みたいことがあつてきたんだ。ボクに君の力を貸してくれよ！」

急に真剣な目をした男は、両腕を開き、演説をする人のようにそういった。しかし、目の前の龍は、返事をするのではない。

「あれ？ ■■■■——」どうしたんだい？ おーい、無視しないでくれよ」

ようやく異変に気が付いた男は、龍に話しかける。しかし、龍は何も反応を返さない。

「んー？ もしかして……」

男は龍に近づいていく。その所為で、男の着ている服は一瞬で凍りついた。それも気にせず、男は龍に近づき、頭に手を乗せた。「？」

男はぺたぺたと触った後、拳を振り上げて頭にたたきつけた。

ガンッ！ 龍の頭が下に叩きつけられ、地響きが発生する。龍の
のが潰れ、顔が縦に割れた。しかし、血は出ず、中身もない。

「死んじゃってるじゃん、なんだよここまで来たのは無駄足か」

男はやれやれと、手に腰を当て首を横に振った。そして男は後ろ
を向いて歩き出す。おおきなため息を吐いて、それ以降振り向くこ
ともせず。

「うーん、仕方がないな。龍樹で我慢するか」
ヴリクシヨナーガシャ

男はそう呟くと、指パッチンをした。すると、強い強い風が吹き、
男の姿は消え去った。

ナギ・スプリングフィールドは、メルディアナ魔法学校始まって
以来の問題児である。その魔法学校最強の魔法使いにして、校長の
息子であり、譲りうけた膨大な魔力は日に日に増加していき、つい
には父の魔力量を超えてしまった。そのことに父は我がことのように
喜んだ。自分の息子が優秀で、喜ばない親がいるわけない。しか
し、ナギがはめて魔法を使ったとき、アルデスカット“火よ灯れ”を使ったはずが、
巨大な火柱を熾してしまったとき、彼は危機感を抱いた。この強
すぎる魔力を制御できなければ、ナギがバカにされるのは目に見えて
いる。ならば、それが発覚しなければいい。彼は、アルデスカット“火よ灯れ”の
呪文がきちんと制御できるまで、ナギの魔法を封じた。これは特別
性の呪いで、初心者魔法以外の魔法を構築できなくする、熟練者キ
ラーな呪い。少なくとも、これが解けるのは二ヶ月はかかると踏ん
でいた。が、ナギはたったの一週間で魔法の制御に成功していた。
父はこのことに困惑した。ありえないのだ。アレだけ魔力制御の下
手糞なナギが、たったの一週間で魔法を成功させるなど。

それだけではない。魔力制御の成功したナギは、いやいや通って
いた魔法学校に、サボらず通い続け、魔法先生たちに魔法を教わっ
て、それを一つ1日のペースで会得していく。父はそのことに違和

感を抱いたが、周りの魔法先生たちは、自分に教えを請うナギに好感を抱き、自分の魔道全てを教える勢いで、ナギに知識を詰め込んでいった。

そしてそんな日々が始まり444日目。ナギは父である魔法学校校長に呼び出され、校長室に向かった。ナギはノックもせず校長室に入る。

「オヤジ、来てやったぞ。なんのようだ」

オレは忙しいんだから早く終わらせてくれ。ナギの目はそう言っていた。少なくとも、父にはナギがそう思っていることがわかっていた。

「うむ、ナギよお前いくつ魔法を覚えた？」

「魔法の数？ えーと、たしか今日教わったので丁度千個だな」
「せつ！！」

父は、常に細めている目を大きく見開いた。たった一人の人間の持つ魔法が千個であるというのは、ありえないものである。普通の魔法使いが生涯覚える魔法とは三十個いけばいいほうである。その五倍を1人で会得するなど、正気のさたではない。出来ても、それは何百年も生きる人外の者のみだろう。

「ようはそれだけか？ オレ、これから準備があるから帰るぜ」
ナギは、後ろを向いて部屋から出ようとする。

「までナギ！ なんだ準備とは？」
「なにつて、魔法世界に行く準備だよ」

当たり前のようにナギは言った。首をかしげ、父の方を向く。

「魔法世界？ どういうことだ！」

「オレは世界一の魔法使いになる男だからな。だったらもつと魔法を覚えなさいと」

「そんなもの学校を卒業してからでも間に合うだろう！？」

父はナギを必死に止めようとしているのだろう、声を荒立てる。

「遅いんだよそれじゃ。オレは世界一、それを証明しなきゃいけないんだ、今すぐにでも！」

だんだんと声が荒れていき、最終的には怒鳴っていた。最近、ナギは感情を制御できていない。そのままナギは歩いていき、部屋をでて駆けていつてしまった。

「ナギ！ 待たないか！ ナギ！」

父は追うために、校長室を出たが、ナギの姿はもうなかった。

「誰かいなか！？ ナギを捕まえてくれ！」

父は、職員たちの集まる部屋に駆け込んだ。

「どうしたのですか校長。ナギ君が何か？」

「ああ、あいつ1人で魔法世界に行くといって出て行ってしまったのだ！」

それを聞いた教員たちは、なんと、息を落とした。自分の大切な生徒に大事があつたのかと、心配していたが、校長の話を聞いて安心したのだ。

「えっと、それがどうしましたか？」

父はその言葉に目を見開いた。

「どうかしたか、だと？ 君たちはナギが心配ではないのか！？」

「確かに、最近魔法世界では戦争でも起こりそうなほど本国と帝国の仲はよくありませんが、別に心配するほどではないでしょう？」

ナギ君だったら、大丈夫でしょう！ それに彼の魔法世界行きを後押ししたのは、他ならないボクたちですから！」

目の前にいる黒い髪に紅い瞳を持つ教員が言う。その言葉を聞いた校長は、体をぶるぶると振るわせた。

「ふざけるな！ 確かにナギは素晴らしい才能を持っている。将来最高の魔法使いになることも不可能ではないだろう。しかし、あの子はまだ10歳の子供だ！ 魔法世界行きは早すぎる！」

「へ？ もう10歳の間違えでしょう？ たしか校長は8歳に両親の反対を振り切って魔法世界に単身突入。傭兵をやって稼いでいたとか」

「なっ！？」

何故それを知っている！？ 校長の頭に困惑が渦巻く。

「それに、彼なら大丈夫。攻撃魔法はおろか、回復魔法すら完璧に使いこなす。まさに千の呪文を持つ幼き賢者。いや、賢者は彼には似合いませんね。サウザンドマスターなんてどうでしょう？　きっとナギ君も気に入ります」

「もう良い！　私はナギを追う！」

「そうですか。では、彼によりしく伝えておいてください」

男は笑う。校長は駆け出した。まずは家に向かおう。準備をしているのなら、1度家に帰るはず。いないのならば、ゲートに向かえばいい。そう思考しながら、校長は炎を媒体とした転移魔法を発動した。校長の体は炎に包まれ、足元には魔法陣が広がる。ヒュンと言う音と共に、校長の姿は焼け消えた。

「——さて、彼は魔法世界に行くようだね。きっと面白いことになるだろう。ボクもそろそろ龍樹ヴリクシヨナーガシャのところに行かなくては」

闇のように黒い髪と、燃えるように紅い瞳を持つ男は、どこかで同じ動作——指パッチンをする。すると、男の体は消え去り、そこには魔力の残留のみが残った

。

「くそ、間に合わなかったか！」

ナギの父は、家に向かい、すでにナギが出発したのを確認すると再び転移魔法でウェールズに存在する魔法世界と現実世界を繋ぐゲートに転移した。急に現れた彼に、ゲートの管理者は驚いていたが、稀にゲートに乗り遅れた魔法使いが現れるので、すぐに冷静になった。

「どうなさいました？　乗り遅れでしたら、今日の便は全て終了し

ています。次の機会にお願いします」

「違う！ 私と同じ格好をした赤毛の少年はこれに乗って魔法世界に向かわなかったか！？」

校長に詰め寄られた管理者は困ったように身を縮めた。

「申し訳ありませんが、信頼第一が信条ですので、お客様の詳細をお教えることは出来ません」

「私はその子の父親だぞ」

「それが事実である確証はありませんので」

申し訳ありません、と管理者は頭を下げた。

「しかたない、私はウェールズ魔法協会理事長マギ・スプリングフィールドだ。協会長権限により、事情聴取を行う」

「えっ！」

ナギの父、マギは胸元から魔法協会の各理事長に配布されている首飾りを取り出す。このゲートはウェールズ魔法協会所属のものだ。管理人からすると、国に所属する小さな組織に国のトップが現れ見学に来たようなものである。

「たったしかに、申し訳ありません。ただいま調べますので」

「早くしろ」

理事として最低の権力の使い方。私情でそれを使うなど、普通はあってはならないこと。しかし、それほどまでにマギにとってナギとは大切な存在なのだ。今は亡き妻の忘れ形見。それを失うわけにはいかない。

「お待たせしました。たしかに赤毛の少年、ナギ・スプリングフィールド君は乗っていますね」

「そうか、では私を魔法世界に」

「申し訳ありませんが、それは出来ません」

管理人は本当に申し訳なさに頭を下げる。

「なぜ！」

「ゲートは一ヶ月に一日のみ開くものです。それを開くにもこの大地にたまった魔力を少しずつ使ってこまめに開くものです。すでに

今日の分は使い切ってしまった。残念ですが、魔法世界に渡るにはあと一ヶ月待つて貰うことになりますね」

「くそ！」

マジは、掌で太ももを叩き、悔しさを体で表現する。

（しかたがない、来月一番便に乗ってあちらにわたるしかないか）

マジは、再び転移魔法を使い、魔法学校の私室に転移した。

「すげー！　ここが魔法世界か！」

一方その頃、ナギ・スプリングフィールドは、ゲートによって現実世界と繋がられている魔法世界の大国「メガロメセンブリア」にやって来た。はじめてみるその世界に興味深深のようで、周囲をきよるきよると見回している。

「よし！　オレの最強伝説はここから始まる！　世界一の魔法使いのオレの始まりだぜ！」

ナギは街の中心で叫んだ。周りの人々は子供の戯言と受け取り、ほほえましそうに彼を見ている。そんな中、ナギを周囲とは違う興味の目で見ているローブの人がいた。

「ふふふ、世界一ね。あの子は面白そうです。付いていつてみましょうか」

その声は中性的で、しかし、どちらかという男の声色で。ローブの男は、駆け出して行ったナギに付いていった。

「ふう、結局成果は彼がこっちに来ただけか」

ここはヘラス帝国の首都。黒い髪に紅い瞳にとがった耳を持った男が人ごみにまぎれて歩いていた。周囲の人々は、その全てが人ざらぬ姿をとっており、猫耳犬耳、中には象耳を持つものまでいた。これらは亜人。ここヘラス帝国とは、亜人たちの国なのだ。

「そして、この国には守護聖獣として古龍の一体が存在する」

古龍とは、魔法世界の創世期から存在する最強の種族ドラゴンの

原種。例としては、ヘラス帝国の守護聖獣として存在する『古龍・
ブルクシヨナーガシャ

龍樹』。龍山山脈付近の住民に神として信仰される『氷結龍山』など。その数は10体のみ。ほとんどは姿を隠し、または龍殺しを持つものに狩られて息絶えているが。

男はその伝説的存在を捜し求めてこの魔法世界にやって来た。そして、ようやく見つけたその存在はすでにお陀仏しており、しかたがないのでヘラス帝国の『古龍・龍樹』に合いに来たのだ。
「さてと、そろそろかな」

目の前には王城。この国の帝王とその縁者の住まう城。『古龍・
ブルクシヨナーガシャ

龍樹』は王族の守護が役目なため、ここにいることは間違えない。
現に男はこの城に龍の気配を感じ取っていた。しかし、それはこの前見た亡骸となった古龍と同じ程度の威圧感。少しばかり興ざめだった。

「よし行こう」

男はほんの数秒思考した後、城に向かって駆けていった。

第三話 古龍・下

ここはヘラス帝国王城、そしてその地下に存在する侵入者を一時的に保留する牢獄。そこに男は居た。檻の中に。

さかのぼること三日前。黒い髪に紅い瞳をした男は、普通に王城に潜入した。そしてつかまった。以上である。

「うーん、いまいちな味付けだね。すまないけどその君、そう君だ。しょうゆを持ってきてくれないか？」

なれなれしく男は看守に話しかける。ただいま食事の時間。薄味のそれは、男の口には合わなかったようだ。それを牢屋の檻の前に置く。

「……………」

しかし看守は返事をせず、その食事を取り出し、持って行ってしまった。これで男の晩御飯は抜きになった。

「あれれ？ もっていつっちゃうの？ おーい、無視しないでくれよ。」

声をかけるが、看守は一切を無視して突き進んでいく。

「あーあ、行っちゃった、なんだよ少しくらい話を聞いてくれたってかまわないじゃないか」

きつと彼はツンデレエなんだろうね！ そういつて男はにこにことその場で回った。

「うるさいぞ、少し黙れ」

そこに亜人の男がやって来た。頭には二つの角が生えている。その角は龍の角にも見える。

先ほどの看守とは違う男だ。恐らく、交代の時間がやってきたのだろう。その男を見て、黒髪紅目の男はにやりと笑う。その瞳は紅く紅く燃えていた。

「やあこんばんわ、君の名前はを教えてくださいよ？」

檻に手をかけ、身を乗り出す。その顔は何時も通りの笑顔。

「俺か？ 俺はリウイ」

その笑顔に釣られてリウイと言う亜人の青年は笑顔を返す。

「はは、君はいい奴だね。さっきの看守なんて、ボクを無視するどころか、ご飯までもっていつちやっただよ」

ふう、と男はため息を吐く。それを見てリウイは苦笑した。

「しかたねーよ、あいつは無愛想で有名だし、仕事もきっちりする」
「へー、そういうと君はまじめじゃないみたいだね」

「かはは、そうかもしれないな」

あはははは、と二人は笑いあった。

「しかし、お前、どうしてつかまつただよ？」

「いやー、この城に侵入したらつかまつてしまったんだよ」
それを聞いたリウイは目を見開いた。

「いや、何しているんだよお前！？ そりゃ捕まるだろ」

まるで長年あつていなかった友人同士のように感じる。どこか通じるところがあるのだろうか？

「ところでさ、君って竜騎士じゃない？」

「は？」

突然に、男はまじめな顔をして、リウイに向かっていった。それを聞いたリウイの顔からは感情が消えたように無表情になる。

「なんで知ってるんだ…？」

「いや、君から竜のにおいがプンプンするからね。そうじゃないかと思っただ」

先ほどまでの無表情さが幻かなにかだと思っただにリウイは笑みを浮かべた。

「なんだよそれ、お前は犬か何かか？」

「いやいや、ボクは少し普通じゃないだけの人間だよ」
再び笑顔で笑いあう。

「しかし、なんで竜騎士がこんなところで看守をしているの？」

「……………」

「なにかあるなら聞いてあげるよ。ボクは人の相談に乗るのは得意

だし、もしボクに出来ることなら手伝ってあげるよ！」

その笑顔を見たリウイはため息を吐いて、頭を押さえた。

「ふう、すまないが、愚痴を聞いてくれないか？」

「いいよ、いいよ。何でも言ってくれ」

リウイは檻に背中を任せ、よりかかる。

「俺はつい先月まではこの国で一番の竜騎士だった——」

先月、リウイの愛竜が命を落とした。寿命だったのだろう。リウイが生まれたときからそばにいた彼女は、リウイに物凄くなつていた。だからこそ、彼女が死んだとき、リウイは泣きに泣いて、彼女の分まで竜騎士としてがんばっていくつもりだった。しかし、リウイには欠点があったのだ。それは、竜になつかれないという、竜騎士として決定的にあつてはならない欠点。彼女の場合、本当に小さい頃から互いで互いを訓練しあっていた仲で、彼女はリウイが好きだったし、リウイも彼女が好きだった。竜という種族は、与えられた感情に答えるように人になつく。つまりリウイは、彼女以外の竜に対して、否定的な感情を持っていたのだらう。そのせいで、竜には乗れず、メガロメセンブリアとの国際関係がきりきりとしている中、竜に乗れない竜騎士など、いても価値のないもので、本来ならクビにするとところだが、リウイの持つ能力を捨てるには今の帝国に余裕がないので、王城の警備兵としてここに配置したのだ。

「——という感じでな、俺はここに飛ばされた」

「へえ、それはご愁傷さま」

話を終えたリウイは少しだけすっきりしたような顔だった。

「ありがとよ、少しだけ気が晴れた」

「いいよ、ボクに出来るのは愚痴を聞くことと、少しだけ君を後押しすることだけだ」

「？」

後押し？ リウイにはこの牢獄に囚われている男が何を考えてい

るのかわからなかった。

「君には特殊な能力があるんだろう？ そうじゃなくちゃ、帝国が君をここに配置する意味がない。そしてその能力は恐らく竜に関するものだろう」

早口でいいのべる。男は少しだけまじめな顔をして続きをいった。
「それで、ボクなら君が再び竜に乗れるようにできるかもしれない。それもこの国で最強の竜の乗り手に！」

「な！？」

最強の竜？ その名を聞いて思い浮かべるのは古龍エインシエントドラゴンという種族。
しかも、この国にいるとするのなら『古龍・龍樹』のみだ。男はこれのことを言っているに違いない。

「どうだい？ ボクと契約して、最強…いや、無敵の竜騎士になるうよ」

「……………どうやってだよ。乗れるわけないだろう。俺は竜に嫌われているんだ」

「いや、その欠点ならボクに任せてくれよ」

男は首をかしげて笑った。先ほどから笑顔のままだが、なんとなく表情が変わっている気がする。

「どういうことだ？」

「ボクの名前はね、そうだなこの辺の話だと『ナイラーニヤ』なんて名前で登場したりする」

「はあ？」

ナイラーニヤというのはヘラス帝国に伝わる伝説に登場する神で、ヘラス帝国を建国した初代ヘラスに力を与え、亜人解放戦線を勝利に導いた神だ。黒い髪に紅い瞳、確かにその伝えられている容姿と目の前の男は同じだが、だからといってそれが事実とは思えない。

「信じていないでしょう？ まあ、いきなりそういわれても信じろなんて無理があるよね。——そうだ、仮期間として君に力を与えよう。そしてボクがナイラーニヤだと信じたなら完全な契約をしよう」

「……………」

リウイは天井を見つめて考える。正直言つてこの男の言っていることをリウイは信じていなかった。城に乗り込んできた狂人の狂言、そう割り切つて自分も自分の前の看守のように無視すればいいのに、なぜかリウイはこの男の話を聞き、それどころか自分の愚痴を聞かせてしまった。この男には妙な魔力がある。人をひきつけるカリスマのようなもの。だけど、何故だろう。その感じるカリスマというべき感覚が気持ち悪くてたまらない。

「わかった。契約しよう」

気が付くと頷いていた。少しだけこの男にかけてみようと思つた。この男の言つたことが嘘だとしても自分になんら問題はない。

「それじゃ、頭をこつちに近づけてくれ」

男に言われた通りにリウイは頭を近づける。男は檻の隙間から腕を出し、リウイの頭に乗せた。

「さあそれじゃ、はじめよう……——」

男の掌から光があふれ出した。その明るさにリウイは目を開け、放しにすることができず、目を瞑つた。一瞬の空白の後、リウイの頭から手の感触がなくなった。

「はい、終つたよ」

「もうか？」

リウイは頭を上げ、瞳を開く。

「どんな気分だい？」

視界には笑っている男が映る。

「最高だよ！　なんだこれ！？　世界はこんなにも美しかったのか！？」

その瞳は、紅く輝いていた。その目にはいったい何が映っているのだろう。リウイは周囲を見回し、そのまま歓喜の声を上げる。

「気に入って貰えたようで何よりだよ。これで今日から君は世界一の竜騎士になつた」

「ありがとよ！　なああんた、俺に何かして貰いたいことはないか！？」

「え？ いいのかい？」

「当たり前だ！ あんたは俺の恩人だからな！」

「そうかい？ それじゃあ……—」

男は笑い、リウイは頷く。腰に差してある剣を取り出す。男は一步後ろに下がり、リウイは剣を振り上げる。そして一閃。リウイの剣は檻を切り落とした。二人は顔を見合わせ笑う。方や本当にうれしそうに、方や狂ったように。

「やあ龍樹ひさしぶりだね。龍山は死んじやってたから代わりにこ
ヴリクシヨナーガシャつちに来たよ。そうそう、良かったね君の主人が見つかったよ。君
は自分に見合う主を探すためにこの帝国に滞在しているのだから、
ここにいない必要がなくなつた。よかったね！」

目の前には異様な威圧感を発する龍が存在する。これが『エインシエン・アツリ古龍・
ヴリクシヨナーガシャ龍樹』、現存する伝説。今まで見てきた竜たちとは存在の格が違う。
そうリウイは感じた。現に、今かの存在の前に立っているだけで自
分が消えてしまいそうな感覚を……—覚えなかった。

今までの自分だったならここで気絶してしまつただろう。しかし、
今の自分は違う。世界一の竜騎士がリュウにおびえてどうする。今
の自分なら出来る。この龍を跪かせ、我が物にすることも……。

「リウイ君、さあ龍樹が君の命令を待っている」

「ああ……」

リウイは大きく息を吸う。精神を落ち着かせ、この龍を屈服させ
る。簡単だ、ただ一言言うだけ。それだけでこの龍は俺に——。

「——従え」

一言。これを聞いた龍樹の体に、今まで感じたことのない感覚が
走った。いや、この感覚には覚えがある。原初の記憶と言う名の本
能の中に。これは主に支配させると言う快感。ああ、我が主はこの
亜人か。この方にこの先一生を捧げればいい。

「グオオオオオオオオオオッ！！！」

ヴリクシヨナーガシヤ

龍樹は歡喜の咆哮を上げる。その咆哮は帝国中に響き渡る。龍樹

ヴリクシヨナーガシヤ

は初めて背中に主を乗せて宙に舞う。背中に主以外の人間が乗っているのは少しだけ嫌だが。

ヴリクシヨナーガシヤ

龍樹は足に力を入れて、地面をけた。それにより石詰め床が決れる。天井が龍樹の常時展開している障壁とぶつかった衝突で大きな音を発しながら崩壊した。

城の一部が崩れる。それだけで、城内は混乱に陥った。

「おい！ どうなっている！」

ヴリクシヨナーガシヤ

「見ろあれ！ 龍樹じゃないのか！？」

「なぜ帝都守護聖獣が城を壊すのだ！？」

「おい背中に誰が乗ってなかったか？」

「脱獄だ！」

ヴリクシヨナーガシヤ

まさに混沌とした状況。人がひしめき合い龍樹の空中遊泳を見つめている。

しかし、数人は正気を取り戻し、指揮を行っている。

「攻撃用意！」

ウンテキム・スピリトゥス・アエリボレイザルム・ファクティイニミクム・カブテント

サギタ・マギカ

アエーテル

「風の精霊11人、縛鎖となりて敵を捕まえろ、魔法の射手・戒めの風矢！！！」

数人が同時に捕縛属性の風の矢を放つ。しかし、相手は究極の幻想種ともよばれるドラゴンの原種「古龍」ヴリクシヨナーガシヤ。一桁の人数でその障壁を突破できるほどの威力はない。結果、龍樹は優雅に空を舞い、天かなたへ飛んでいった。

ヴリクシヨナーガシヤ

「くそ、龍樹は北の方角に飛んでいった。もしかしたら新しき民の策略かもしれない、皇帝に指示を上げ！」

「了解！」

ヴリクシヨナーガシヤ

テキパキと行動を取るが、すでに龍樹は見えなくなっていた。兵達は空を悔しそうな顔でにらみつけたあと、城に入っていた。

一方、上空にて――。

「素晴らしい！　なんて力強い羽ばたき！　なんて美しい風きり音！　なんて綺麗な龍なんだお前は！　最高だよ！」

「ウリクシヨナーガシヤリウイは龍樹の上で両手を広げて喜びを表していた。

「気に入って貰ってなによりだよ、それで君に与えられた力は具体的にどんなものなんだい？」

男はその後ろでニコニコとリウイを見ていた。

「あんたが与えたもののに、あんたはわからないのか？」

「ボクの力はもともと人が持っている才能を過大評価して現実化するものだからね。そこら辺は割りとアバウトなんだ」

「そうか、そうだな俺の世界をあんたにも教えてやりたい！　今、俺の視ている世界は、光に包まれている！　ウリクシヨナーガシヤ龍樹の羽ばたきによつ

て発生する風の向きや速度、空気の数密度なんかも理解できる！　そして何よりも、世界は精霊で満ち溢れているんだな！　白黒赤黄緑青——数え切れないほどの色が溢れている！　最高だよ、こんな世界が俺の望む色、カオスだ！」

「忘れるなと言わんばかりにウリクシヨナーガシヤ龍樹は唸り声を上げた。

「ふふふ、そうだな、お前も最高だ。あんたも最高だ！　今俺の世界に映るもの全てが最高だ！！」

あははは、と大きな声で笑う。笑う、笑う。

「それでリウイ君、ボクはこれから行くところがあるんだけど、すまないが付いてきてくれないかい？」

「ああ、あんたは恩人だからな、それくらいどうってことないさ」

「うれしいよ、ボクは感激するね。世界には君みたいな人があるまりいないからね。この前だって突然、どこかで見たことあるような女の人に襲われてさ」

ふう、とため息を吐いた。リウイになぜ自分と反する存在としてそんな危険な女が上げられたか知らないが、別に気にしないことにした。何事も必要以上に関心を持たないほうがいい。リウイは本能に従い、話を変えた。

「そつえば、あんたのことなんて呼べばいいんだ？　ナイラーニ

「ヤあたりとか？」

「そうだね、それじゃゲシュちゃんって呼んでくれ」

なぜゲシュちゃんなのだろう？ ナイちゃんあたりでいいのでは？ そう思ったが、口には出さなかった。

「わかった。これからよろしくたのむぞゲシュちゃん」

「そうだねよろしくリウイ君！」

ヴリクシヨナーガシヤ

グアアアア、という龍樹の唸り声をバツクに二人は握手をした。互いに狂ったような笑みを浮かべながら。

「そうだ、ボクをナイラーニヤと認めたよね、今」

「あ？ そうだな。こんなことが出来るのはナイラーニヤくらいだ」

「それならボクたちの契約はこれでなったわけだけど、ボクは君がボクについてくるように、といった感じが契約の代償にしようと思っていたから丁度いいね。これで契約もなった、改めてこれからよろしくねリウイ君」

第三話 古龍・下（後書き）

つかれた。モンハンやってたらぜんぜんかけていませんでした申し訳ない…。

第四話 羽ばたくアラルブラ？（前書き）

オリジナル設定があります

第四話 羽ばたくアラルブラ？

メガロメセンブリアの首都に来てから早三日。ナギ・スプリング
フィールドは、いまだにここにいた。傭兵ギルドに入ろうとしたもの、子供だからという理由で追い出され、ナギは途方にくれているところだ。しかし、その目に諦めの色はなく、その足はある場所に向かっていた。先日、自分をストーキングしていた魔法使いを倒し、自分に有益な情報を吐かせたのだ。旧世界での活動を主にしているNGO団体「悠久の風」では子供でも実力さえあれば、自分のグループを作ることができるらしい。しかも、今は魔法世界における二大大国である南のヘラス帝国に北のメガロメセンブリアの仲が悪く、各地で紛争が起こっている。その鎮圧と救助の為に魔法世界進出をするのだ。

これは丁度いいと、ナギは思う。しかも、その支部はこのメガロメセンブリアにあるというのだ。ますますもって丁度いい。現在進行形でナギはそこに向かっていくのだ。

「しかし、あの野郎。なんだったんだ？」

ナギの脳裏に浮かぶのは自分を付回してきた魔法使い。フードを深く被り、中性的な声だった。

「おっ、ここだな！」

目の前には近未来的な建物が立っている。周囲にはふわふわと看板が浮いていて、一度だけ父と子供の時に見たウェスペルタイア王国の浮遊島と同じような原理だろう。

ナギは迷わずそこに入った。カランというベルの音と共に、内部の熱気がこちらに流れる。内には厳つい顔をした剣士風の男と、ロブを着た魔法使いの男が数十人いた。

「なんだあ？ 餓鬼がここになんのようなんだあ？」

その中の剣士風の男の1人がナギに気が付いた。そして、ナギに近づいてしゃがんでナギに顔をあわせた。

かべてその右腕を振り上げた。その腕に宿る魔力を見て、剣士風の男は始めて顔を青くした。

「まっまてえ！」

後ずさりながら、命乞いするかのように、腕を前でクロスして、体を守るうとする。

「――フロンター・ビュグメーかみなりパンチ――！」

轟音を発しながら、ナギの拳は男の顔に突き刺さった。まあ、突き刺さったというのはあくまで比喻で、そう感じるほど、ナギの拳は鋭かった。剣士風の男は、地面にめり込み、体は全てコンクリの中に埋まってしまった。

「さあ、次は誰だ？」

「ひい!?」

そこにいたほとんどの人たちは這いずるように、その場から逃げ出した。

そして、残ったのは、本当に数人しかいなかった。

「まったく、君はやっぱ面白い」

「あ！ てめーは!？」

一人の男がナギに話しかけてきた。にこにこと、フードの下から少しかだけ覗いている口で笑いを浮かべる――それでもそれはどこかの誰かのような嫌悪をかんじるようなものではない。その男は、つい最近まで、ナギを追いついていた男。その名もアルビレオ・イマ。

「なんでここに居るんだよ!? 俺についてきたのか!？」

ナギはアルビレオを指差し、叫んだ。

「ふふふ、私は君より先にここにいるのですよ? どちらかといえば、君が私についてきたのでは?」

「そんなわけないだろ!？」

ナギは獲物に噛み付こうとする狼のごとく、アルビレオに詰め寄った。ナギに詰め寄せられたアルビレオはその鋭い眼光に少しだけ冷や汗を流す。

「冗談ですよ、冗談。そんなにカリカリしないでくださいよ。私はあなたの為に行動しているのですから」

アルビレオはそういつてナギの横に移動した。ナギはそれを胡散臭い者を見るような目で見る。

「第一、お前の視線がよくねーんだよ。まるで獲物を見つめるような――、こつち見るな！」

ナギはそういつて身を震わせる。その様子は年相応な子供の反応のようにも見えた。そして、すぐ目の前にあるナギが殴った剣士風の男が座っていた椅子についた。

「ところで、どうやってここに入るつもりなのですか？」

「あ？」

「いや、確かに私の教えた通り、ここでは何か起こったとき、メガロメセンブリアに強力する代わりにグループを作ることができます、が――」

アルビレオはナギの隣に座る。そして体をナギの方に向けてフードの下目を怪しく光らせる。

「が？」

「ええ、「が」です。グループを作れますが、君にはまだ作れませんか？」

「なんでだ？　ここでは年は関係ねーんだろ？」

「グループのリーダーになるのも、グループを作るのにも年齢は関係ありませんが、一つだけ絶対にクリアしなければならぬ条件があるのです」

「力ならさつき俺は見せただろ？　頭だつて教わった呪文を全部覚えてる程度は良いし……おい！　アルビレオ！　条件はなんなんだ！？」

「簡単です。条件とは一定の数以上の仲間がいなければグループを作ること出来ません」

「数？」

「当たり前でしょう？　一人ではそれをグループとは言いません。」

よってあなたがグループを結成したいなら、少なくとも三人は数が必要ですね」

ナギはそれを聞いて顎を手で支えて思考する。数秒たち、ナギは手を離しアルビレオを探るような目で見た。

「なあアルビレオ？」

「なんでしよう？」

「お前の得意魔法ってなんだ？」

「得意魔法？ 全体的に使えますが、しいて言うなら「重力」ですかね」

「重力だつて！？」

ナギはその言葉に驚きを隠せないようだった。それもそのはず。

重力魔法とは、星の精霊の力を借りて重力を想いのままに操ることの出来る上位魔法の総称。ナギならば教われば出来ると思うが、魔法学校の教師でこの重力魔法の使える人間は一人も存在しなかった。「とはいっても、重力球を作り出す程度の呪文しか使えませんかね」「それって得意って言うのか……？」

「ええ、これでも十分なほどです。重力球はいわゆる魔法の射手の重力属性版のようなものでして、これの熟練度を上げれば上位魔法にも匹敵する程度までいけますね」

ナギはそれを聞いて目を輝かせた。千の呪文を覚えたが、この世界にはまだ自分の覚えることの出来る魔法が残っている。それだけで、ナギは体から歓喜の感情が湧き出てきた。

「おいアルビレオ！ お前、俺の仲間になつてそれを俺に教えてくれないか！？」

「かまいませんよ。もとよりそのつもりであなたをつけまわした訳です。それではこれからよろしくお願いしますよ、ナギくん」

「呼び捨てでかまわねー！ そんなじゃこつちもよろしくなアル！」

ナギは立ち上がり、笑つてアルビレオと握手をする。ぶんぶんと上下に振られる腕を他人事のように見ながら、アルビレオは軽く思考した。

（ずいぶん現金なものですな、いつの間にか愛称で呼んできてますし。まあ、彼のそういう子供らしさも私は引かれたのかもしれないですね）

「ところでナギ」

「なんだアル？」

椅子に座りなおして、ナギが殴った男が頼んでいたのだろう酒のつまみをナギは食べた。ここは、簡単な酒場としても使えるようになっており、酒場の主は先ほどからにこと笑っているだけなので、恐らくここでの暴力沙汰は日常茶飯事なのだろう。そんなナギに苦笑しながらアルビレオは彼に話しかけた。

「私が仲間になっても、グループは結成できませんよ」

「知ってるよ。仕方がないから、明日にまた来て誰か仲間になつてくれないか聞けばいい」

「そうですね。——— そうですね、あなたは旧世界出身でしょう？」

△ンドゥス・ウェトゥス

何故あなたのような年齢でこちらに來たのですか？」

「そりゃ、アルみたいな人にあつて、魔法を教えて貰うためだ」

「そうですね」

アルビレオとナギの会話はそこで途切れた。

「すいません、私にも軽い食べ物とジュースをもらえますか」

「わかりました、少々お待ちください」

アルビレオは酒場の主にそう告げ、フードを下ろした。そこから現れるのは美形の顔。男よりな女顔の中性的で、黒く長い髪は後ろで一束に纏めている。

カランと、ベルの音が來客を告げる。來客は眼鏡を掛けた黒い短髪で、手に持つ細長い袋が目立つ、針金のような肉体を持った男だった。

男は内部の静けさと、人の少なさに少し驚いたようだが、すぐに平静を取り戻すと、アルビレオの隣の椅子に座った。

「どうも」

アルビレオは笑顔で挨拶をする。隣の男はこちらを向き少し驚い

たが、すぐに頭を下げる。寡黙な男だ。アルビレオはそう思った。そして何に驚いていたのか少しばかり疑問だったがすぐにそれも解けた。アルビレオの隣に座っているナギを見て驚いたのだろう。ここは戦いの中に生きるものが集まる集会所のような場所。そんなところにナギのような幼い子供がいて驚いたのだろう。

「おまたせしました」

酒場の主はオレンジジュースとスナック菓子をアルビレオの前に置いた。確かに軽い食べ物とはいったものの、こんな三時のおやつがでるとは思わなかったらしく、アルビレオは少し驚いた顔をしていた。

「水を頼む」

寡黙な男はそういった。今度は数秒で水が用意された。

「そうだ、ナギ。何故あなたはここでグループを作ろうとしたのですか？ 魔法を教わるだけなら、そんな必要はないと思うのですが

……」

「んー？ 別に特にこれといった理由はねえけど……。しいて言うなら腕試しのためだね」

「ほう」

「俺の夢は世界一の魔法使いだからな。そのための第一歩がここ魔法世界メガロメセンブリアなのさ」
ドウス・マギクス

「そうですか、最近帝国と小競り合いが頻繁に起こっていますからね。そのうち大きい戦争になるでしょう。それも、この世界を分裂させるほどの」

「ちょうど良いな。それに参加して腕試しだ。しかし、それなら早めに三人目の仲間を見つけないとだな」

ナギはつまみを全部食べ終わり、腹を軽く叩きながらいう。アルビレオは口元に食べカスが残っていることに気が付き、備え付けのナプキンで口を拭いてあげた。

「少しいいかな？」

突然、アルビレオの隣に座った寡黙な男が話しかけてきた。

「なにか？」

「君たちは三人目の仲間を探しているのだろう？　なら私を仲間に入れてくれないか？」

「あなたをですか？　どうして？」

△ンドゥス・ウェトゥス

△ンドゥス・マギクス

「私も旧世界から腕試しに魔法世界に来たのだ。しかし、どうやって腕試しをしたものかと考えていたのだが、思いつかなくてなおりあえずここで考えようと思っていたところに君たちの話を聴いてな」

「ふーん。まあ別に良いぜ。これで三人そろったな」

「ちよつと待つてくださいナギ！　そんな簡単に決めてもいいのですか！？」

「別に大丈夫だろ、こいつ十分強そうだしさ、俺も魔法使いとばっか戦ってきたから、剣士とも戦ってみたかったんだ。ちよつど良いし」

ナギは獰猛な獣のように口を三日月のように笑った。それをみた寡黙な男も、への字にしまっていた口を緩め、笑みを浮かべた。

「望むところだ。私も剣士としか戦っていなかったからな。子供とはいえ、君はそうとうの腕と見える、私と戦ってはくれないか？」

「良いぜ、俺の名前は最強の魔法使いナギ・スプリングフィールド！　将来は世界一で無敵な魔法使いになる予定だ！」

「私は京都神鳴流、青山詠春。将来は究極の剣豪になる予定だ」

「あなたもずいぶんノリが良いですね……。私はアルビレオ・イマ

普通より強くてかつこいいの魔法使いです。それにしても京都神鳴

△ンドゥス・ウェトゥス

流ですか、聞いたことはありますね、確か旧世界の日本という島国に存在する魔を断つ剣。退魔剣士としては世界最強、でしたか」

アルビレオは一人ごとのように呟く。現に二人はにらみ合い、周りの声など聞こえていないだろう。

「このままじゃ、ここで始めてしまいそうですね。それはお店の方に迷惑がかかるだろうし。そういえばこの支部ではキティの持っていた別荘と同じような物があるはずでしたね……。——すいませんがそれを貸してはもらえないでしょうか？」

アルビレオは酒場の主にそういった。酒場の主は頷くと、部屋の角にある透明なボトルを指差した。

「あれがそうですか」

近づいていき、その中を覗きこむ。それは草木の生えていない不毛の大地である島がある。島の最北には巨大な城が建っているが、古めかしく作っていて所々崩壊しているため、城として使用は出来ないだろう。

「さて、彼らを止めないと」

そういつてアルビレオはナギと詠春の方をみた。二人はすでに臨戦態勢を取っており、魔法使いのナギ・スプリングフィールドはその右手に杖を、左手に魔力を込めていた。剣士である青山詠春は、身の丈ほどはある鍔のない野太刀を構え、その刀は気で高ぶり閃光を散らしている。二人ともこの支部を壊す気まんまんである。本人たちにその気はないだろうが、そんなことをしたら出入り禁止になつてグループを作ることとは泡となって消えうせるだろう。

アルビレオはため息を吐き、自分が魔法を発動するために使う魔法発動体の指輪を取り出しそれを撫でる。そしてそれを右手の人差し指にはめた。

バルティタ・カムイロテロ

「『沈め』」

右手を今にも飛び出しそうなナギと詠春の二人に向けて、魔法を発動する。それは無詠唱の重力魔法。いうならば“火よ灯れ（アーレスカット）”の呪文の重力版だ。ちょうど飛び出した二人の頭上に黒い球体が発生する。

「あが！」

「げふっ！」

二人の戦士は、突然の上からの圧力に耐えられず、下方に落ちていった。二人が地面にへばりつくと同時に圧力は消え、球体も消失した。

「すいませんが二人とも、場所を変えますよ。ここで戦われると、私も巻き込まれてしまいます」

「ぐぐぐ」

「っ」

二人は立ち上がり、服についた汚れを落とそうとはたこうとするが、ここが室内で、屋外ではないことを思い出し、ごまかすようにポケットに腕をつっこんだ。これはナギの行動で、詠春は普通に強くぶつけた部分を撫でていた。

「それではこの魔法陣の上に立つてください」

酒場の主——実はこの支部の長——は、言う。それを聞いてナギはポケットから手を出してすたすたと近づいていった。

「なんだよこれ？」

「これは別荘ですよ。とある特殊な魔道具アーティファクトでしてね、内部の時間と外の時間がずれる物です。この場合は……」

「内部での一時間がこちらでの一分となります」

アルビレオをフォローするように支部長（酒場の主）はいった。

「——らしいです。これをもっている私の知り合いは女の敵だといっていましたね」

「すごいな、これが魔法か」

詠春は心底歓心したようで、頷いていた。

「さつさといこうぜ！」

ナギは未知の魔法にわくわくが抑えきれずにその魔法陣に乗る。すると一瞬でナギの姿は消えてしまった。

「さて、我々も行きましょう。あまりナギを待たせてはかわいそうです」

「そうだな、一分一時間だから一秒一分か」

二人は話ながら魔法陣に乗った。

第四話 羽ばたくアラルブラ？（後書き）

不定期更新ですので、これくらいが多分最速ですね
アルの重力魔法あたりが捏造です。呪文「沈め」はギリシャ語で
「重力・下方」です。
ちなみにエキサイト翻訳。

第五話 羽ばたくアラルブラ？（前書き）

少し調子がいいので早めに更新

第五話 羽ばたくアラルブラ？

「さて、帝国での騒動はしっているな？」

「エインシエンササラダナナガシヤ『古龍・龍樹』の突然の飛翔、まあ逃亡ですか。その話でしよう？」

「ああ、そうだ」

窓のない白い部屋。電灯もないのに昼間のように明るいその部屋に周りに溶け込むように真っ白な服を着て、これまた凹凸のない白い仮面をつけたものたち四人が白い椅子に座っていた。一人は他のものたちよりも高い位置に座っており、仮面には他の者達とは違い、金色の蝶の模様が刻まれている。

「知らない奴もいるようだから教えてやろう。先日、ヘラス帝国帝都守護聖獣の一体である。エインシエンササラダナナガシヤ『古龍・龍樹』が突然飛翔し、どこかに飛んでいった話だ」

仮面に金色の蝶の模様が刻まれた者が言った。その声は低く、恐らく男だろう。

「ほう、あの龍樹がですか」
ブリクシヨナナガシヤ

「聞くところによると、何者かが背中に乗っていたらしいですな」

「そう、それと同時に王城の牢獄からその先日、城に侵入してつかまった男が脱獄したらしい」

「？ それがどうかしたのです？」

金色の蝶の男が言った。その言葉に、そこにいる金色の蝶の男以外の人間は頭に疑問符を浮かべる。

「そいつの特徴は黒い髪に紅い瞳。耳がとがっていたらしいが、恐らく彼ならばそのくらいの偽装は出来るだろう」

「彼？ その彼とは？」

四人の内の一人が四人の言葉を代弁するように金色の蝶の男に聞いた。金色の蝶の男は初めてその四人の方を見下した。

「世界の傍観者「統一呪言」^{ゲシュタルト}」

「ゲシュタルトですと!？」

「あの悪意の根源が魔法^{マジック}世界にですか!」

「そうだ。彼がここにいる」

「あれ? 気付いていたの？」

「は？」

「え？」

一人の白い男が立ち上がる。その男は周りの人たちと違って仮面をつけていなかった。その容姿は黒い髪に紅い瞳。先ほど話していた統一呪言^{ゲシュタルト}と全く同じ姿をしている。

「気付けなかったな。ここでは魔法を使えないはずなのだが」

「これは魔法じゃないからね。これはボクの才能だよ」

「他人に才能を与えて、最後にはそれを取り上げる」

「そんなことはしていないよ、これはいらないうつて子から受け取ったものだ」

「それも言葉遊びだろう」

金色の蝶の男は黒い髪に紅い瞳を持った男を睨みつける。実際に瞳は仮面に隠れて見えないが、その場の雰囲気は凍りついた。

「怖いな、そんな目でボクを見ないでくれないか？」

「ふん」

場の空気が元に戻る。紅い目の男はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「ところであなたはここに何をしに来たのだ？」

「少し君たちに言いたいことがあってね」

「なに？」

「うん、宣戦布告だよ。ボクはそのうちメガロメセンブリアと戦争を始めたいと思いきマース!」

紅い瞳を燃やし、右手を上げて軽く宣戦布告をする。

「あなたは傍観者ではないのか？」

「そう、ボクは傍観者さ、今も昔も未来でも。でもここは物語で語

られることのない、あつたとしても一行だけで済んでしまうもの。ボクの役目はこれで終了。これからはいつも通り傍観に徹するよ。それじゃーね」

紅い目の男が指パッチンをすると男の体が炎に包まれて消えた。

「消えた……」

「あれが生ける神代の者——か」

「議長、どうしますか？」

白い男たちは金色の蝶の男に聞く。金色の蝶の男はくつくつと小さな笑い声を上げる。

「議長？」

「帝国との戦争を始めるぞ。準備期間には最低三年は掛ける」

「は？」

「いいからやれ」

「了解しました！」

金色の蝶の男は出口に向かって歩いていった。その姿を三人に減ってしまった白い男たちは見つめている。思考の片隅に、覚えのない恐怖の感情を抱いて。

「遅いぜお前ら！」

メガロメセンブリアにある旧世界の魔法使いによる組織「悠久の風」支部の内部にある特殊な魔道具「魔法球」アーティファクト。別荘という通称のついているそれは非常に価値の高いものであり、なんと内部に入ることの出来き、しかも外とでは流れる時間が違うという高レベルな魔法のかかったものである。

そしてここはその魔法球の内部。そこには赤毛の少年が目くじらを立てて近くにある魔法陣を睨みつけていた。しばらくすると、魔法陣から光があふれ出し二人の男が姿を現した。一人は白いローブを着た長い黒髪で後ろに一束に纏めていた。もう一人の方は短い黒

髪に、セーターのようなものを着て右手に巨大な野太刀を持っている。

「すいませんナギ、結構早めに来たつもりだったのですが……」

「同時に入らないと内部では結構な時間が過ぎてしまうようだな」

「あ！　そういえば時間がずれるんだったか？　ならいいや、さっさと始めようぜ！」

ナギは好戦的な笑みを浮かべて背中に装備してある木の杖を取り出す。

「それもそうだな。私も早く戦^やり合いたい」

巨大な野太刀「夕風」を青山詠春は鞘から抜き放った。

「では、私は少し離れますので、もう少し待ってください」

アルビレオはそういつて右手の人差し指に差してある魔法発動体をなで、無詠唱で転移魔法を発動した。恐らくは遠見の魔法でこちらを観戦するつもりだろう。

「じゃあ始めようぜ！」

「応——！」

同時に飛び出す。詠春は牽制に複数の気弾をナギに向かって放つ。

ナギはそれを魔法障壁で無効化した。

「魔法の射手、連弾・光の37矢——！」
サギタ・マジカ セリエス ルーキス

ナギはお返しとばかりに三十七の光り輝く魔弾を発射する。破壊属性のそれは一斉に詠春に襲い掛かった。

「この程度なら！　神鳴流奥義！　斬空閃——！」

詠春は何もないところで愛刀夕風を振り下ろす。すると、曲線状の気弾が放たれる。それはナギの放った魔法の射手と激突し、相殺するように消えた。

「ちい！　スマッシュ・スラッシュ・オーゲイション、来れ、虚空
ケノテイトス・アスの——！」

「させん！　神鳴流奥義！　斬岩剣——！」

詠春の鋭い一撃で、ナギの張っていた魔法障壁は破壊されてしまう。それを貫通してやってきた詠春の一振りをナギはのけぞるよう

にして避けた。しかし、完璧に避けることは叶わず、顎に刀がかすり、赤い筋を作り出した。

「くそ！ 食らえ！」

ナギはローブの袖で顎の血をぬぐった。そしてそのまま、風の矢を三つ詠春に向かって無詠唱で放つ。詠春はそれを刀の一振りで消し去ると、ナギに切りかかるうとそのまま刀を振り上げた。

ルーカス
「光よ！」

「何！？」

ナギはその隙を逃さず、左手の中指にはめてある指輪——昔、父に買ってもらった予備の魔法発動体によって“火よ灯れ”と同じ初心者用の魔法を発動する。ナギの馬鹿みたいに多い魔力によって発生した光は目を晦ますほどに強いものだった。詠春はそれによって目を潰されてひるんでしまう。ナギはその間に距離をとる。

「さつきは邪魔されたけど、これなら行けるぜ！ スマツシュ・ス
ラツシュ・オーゲイション！ ケノテイトス アストラブサトー デ・テメトー 来れ、虚空の雷薙ぎ払え——ディオス・テ
ユコス 雷の
斧——！！」

ハイ・エイシェント
雷系統の上位古代語魔法。それはナギが初めて覚えた攻撃魔法。
ディオス・テユコス
雷の斧は叩きつけられるように詠春に激突した。

「どうだ！ 俺様得意の雷の斧、これの直撃で立っていた奴はいないぜ！」

ディオス・テユコス
地面からは雷の斧の攻撃によって吹き飛んだ詠春が引きずられたせいで、土煙が舞っている。その濃さから詠春の様子を見ることは出来ないが、恐らく今の一撃で気絶しただろう。と、ナギは考えていた。先ほど言ったとおり、この魔法が直撃して気絶しなかったものは一人もいなかったのだから。

「神鳴流、奥義——斬鉄閃！！！」
デフレクシオ
「！？ 風楯！！！」

土煙を吹き飛ばして飛んできた螺旋を描くえが気の塊に気付くことの出来たナギはとっさに体中を覆っている魔法障壁を手に集中させ魔法の盾を作り出し、その一撃を防いだ。相当の威力だったらしく、

ナギの体は数メートル後退していた。

「ふう、なかなかの一撃だったぞ」

「……結構自身あつただけだな——。どうしてそんなに傷が少ないんだ？」

晴れた土煙の向こう側に夕風を軽く振るい、空気を切っている詠春がいた。その姿は上位古代語魔法という、魔法の中でも中の上の威力の技が直撃した人間のようにには思えないほどの姿だった。服が多少裂けただけで、他には顔に少しかり切り傷がついているだけだ。

「私は剣士であると同時に術士でもあつてな、対雷撃の符を使っただけだ」

詠春はポケットから黒ずみになった長方形の紙を取り出す。

「しかし、一瞬でこれが壊れるとは、使い捨てではないのだが……」
「やるじゃねえか！」

詠春のその言葉にナギは興奮を覚えた。少しかり道具を使うのはずるいと思ったが、昔授業で習った東洋の呪術士は紙に意味を込めた言葉を書き込み、それを開放して武器とするということを思い出した。詠春が呪術士でもあるのなら、きっと彼の紙型は自分達で言う魔法発動体と一緒にあると。それがずるいというのなら自分は無手で戦わなくてはなくなる。無手にも自身はあるが、プロの剣士である詠春と比べると、それは素人と経験者ほどの差だ。

「自己回復^{ペイ}」

詠春は頬に出来た切り傷をさすりながら呪文を唱える。それは自己回復の呪文。詠春の傷は巻き戻しされるように数秒でなくなった。「なああんた、俺のことはナギでいいから、あんたのこと詠春つてよんでもいいか？」

「別にかまわんよナギ」

返答にナギは笑みを浮かべる。その顔は無邪気に笑う年相応なものだった。

「詠春、俺楽しいよ、多分今まで戦^やってきた戦いの中で一番」

「私も西洋魔術師…魔法使いと戦うのははじめてだからな、驚かされてばかりだ」

「俺だって驚いたね、マイナーだって侮れない」

「当たり前だ、京都神鳴流は最強の退魔士。日本を魑魅魍魎から守り続けてきた剣術、呪術だ」

二人は構えを説かず話す。気付くと詠春も笑っていた。

「けどよ、こっちだって負けたくないんでね！」

「こっちの台詞さ！！」

同時に飛び出す。ナギは雷属性の魔法の射手を発動する。それは小さく圧縮されナギの拳の周囲をくると回りだした。詠春は気を高め、それを全て自らの愛刀夕凧に注ぎ込む。夕凧は詠春に答えるようにバチバチと電気を発した。

「スカツシュ・スラツシュ・オーゲイション、来れ雷精、風の精！」
ウエニアント・スレーマウヌーレス・フルグリエンテース
クム・フルグロティオカボット・テンベスタタタストーリーナ
雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐——」

「神鳴流……——決戦奥義……」

ナギは、今体に残る出来る限りの魔力をかき集め——。

詠春は、今体に残る出来る限りの気力をかき集め——。

「いくぜ！——ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス雷の暴風！！！」

「真・雷光剣！！！」

方や雷と旋風の暴力。方や雷と爆撃の暴力。ナギの魔法と詠春の奥義がぶつかり合う。雷と雷の戦いは壮絶な輝きを発して——。

——爆発した。

「まったく、二人ともやりすぎですよ」

「わりい」

「すまん」

ここは悠久の風メガロメセンブリア支部。どこかのこじやれたバ

「のような雰囲気をするそこに三人の男がいた。とはいっても、一人はまだ少年といったほうがいいだろう。彼はナギ・スプリングフィールド。つい先ほどまでここに設置されてあった魔法球で詠春と模擬戦を繰り返していたのだ。結果は引き分け。ナギの放った最大級の雷ヨウイス・テンベスター・フルグリエンスの暴風と、詠春の放った最高級の真・雷光剣。二つは混ざり合うように激突しなのち、反発しあい爆発した。魔力と気。それは互いに反発しあう相性最悪のエネルギー同士。その二つをわざと混ぜ合わせ、強力な力を得る咸卦法という究極的に会得の難しい技術があるが、そんなものが出来るはずもなく、二つのエネルギーは反発しあって崩壊したのである。その結果が爆発である。現在、その爆発により魔法球がしばらく使用不可になるほどのダメージを受けてしまい、二人は仲間であるアルビレオにしかかられているところだった。

「ところで私を仲間にしてくれるかな？」

「いいぜ、詠春はつえーし、たまに俺の相手してくれよな！」

「わかってる」

「これで三人そろいましたね、ところでナギ。グループ名を何にするか決まっていますか？」

「おう、それはもう決まってる！　いいか、耳の穴かっぽじってよく聞けよ！　二度はいわねえ！　俺たちのグループの名前は！」

ナギは引つ張りに引つ張って、そして広大に、かっこをつけて、両手を振り上げて、語りかけるように、無駄に大声で言った。

「——『アルブラ紅き翼』、だ！！」

第六話 羽ばたくアラルブラ？（前書き）

原作キャラ改変です。

第六話 羽ばたくアラルブラ？

ナギ・スプリングフィールドをリーダーとした悠久の風所属グループ「アラルブラ紅き翼」は、組織に派遣され、メガロメセンブリアの同盟国と、ヘラス帝国領土の境界に存在する小国「クライス」に向かっていた。そこではヘラス帝国の現地人と、メガロメセンブリアの騎士隊との戦闘が起こっていた。それは紛争と呼ばれるレベルで、いずれことは大きくなり、戦争になるだろう。この紛争の原因は両国とも言い分が違っており、ヘラス帝国側は「我が国の領土に武装した兵士どもが進入してきたので、撃退したのみ。これは国際問題だぞ」という、筋の通った正当防衛を主張し、メガロメセンブリア側は「我が国の同盟国クライス付近に凶暴な魔物が出現したため、討伐に向かったが、その先で亜人に妨害され、攻撃された。これは宣戦布告とみて良いのか？」という、これまた筋の通った発言だった。どちらにも矛盾点は存在せず、俗に言う「鶏が先か、卵が先か」といったものである。クライス国にも少なくない被害が出ており、メガロメセンブリアの要請を受け、悠久の風は救出グループを派遣したのだ。それが創立一ヶ月目に突入した戦闘グループ「アラルブラ紅き翼」。
グループ数は三名という、グループとして成り立つのもぎりぎりの数だが、その戦闘力は三人でそこらの一師団程度なら一蹴りに出来るほど。それに、グループ全員が高度な医療魔法が使えることも原因だった。悠久の風から出撃命令の出された紅き翼の面々はようやく活躍の場が出来たと、大急ぎでそこに向かったのであった。

「なーアル、目的地まであとどれくらいで着くんだ？」

「ウェスペルタイア王国で休憩してから向かうので後一日はかか

りますよ」

「こんな飛行船に乗らないで、一気に飛んではばすぐじゃないか」

「詠春がいるでしょう。彼は飛べません」

「すまん」

「そーだっけ。わり、忘れてた」

ここは上空。雲と同じ高さを風を切りながら進む飛行船の内部。

割と高級な飛行船で、素晴らしい装飾の施してある客室にナギたち^{アルブラ}紅き翼はいた。ソファに優雅に座りながら紅茶を啜るアルビレオ。

壁に寄りかかり、目を瞑って瞑想をしているのであるう詠春。そして、窓から外を楽しげに眺めているナギ。それぞれが自由気ままな行動を取っていた。

「それじゃ、ウェスペルティア王国にはあとどれくらいで着くん
だ？」

ナギは外から視線をはずし、部屋の中央にいるアルビレオをみる。
アルビレオはいったん紅茶を備え付けのテーブルに置いて話し出す。
「あと三十分もあればつくでしょう。ウェスペルティアからクラ
イスまでに飛行船はありませんからね、そこからは歩くなり、走る
なりしていくしかないでしょう」

「そのウェスペルティアで夜を明かし、早めに向かうのか」

「ええ、そうです。着くのは早いに越したことはありませんが、夜
には魔物が出る危険がありますからね」

「別に倒していけばいいじゃん」

ナギはアルビレオの横に座り、テーブルに置いてある自分用の紅
茶を飲む。

「それでは魔力が少なくなってしまうでしょう？ 無駄な体力を使
う必要ありませんし、これから向かうのはほとんど戦場なのです
から」

「それもそうか」

ナギは一気に紅茶を飲み干して、笑顔になった。

「じゃあ俺はこれから船を周ってみてくるからな！」

「ええ、いつてらっしやい」

「迷子になるなよ」

「詠春！ 子供じゃないんだぞ！」

ナギはそのまま駆けて部屋を出て行ってしまった。ドアノブ式の魔法世界では少し古めな扉がボタンと音を立てて開き、すぐに閉じた。

「みて周ってくるって、子供だろ……」

「ふふふ…、ナギもまだ十歳ですからね」

「まだそんな歳なのか。もう少しいつてると思っていたが」

「結構大人っぽいですからね、ナギは」

二人の大人はやさしく笑った。

「すげー！」

ナギははしゃぎながら船の探索を始めた。一番前の大広間は、透明なガラスで覆われており、広大な大地を部屋にある小窓よりもよく見ることが出来た。船の左側にはトイレが男女で四個備え付けられており、それは右側も同じだ。細い廊下は魔法の蛍光灯で照らされている。

ナギは走り回る。それは無邪気に遊ぶ子供その者だった。そろそろ部屋に戻ろうかと、右側の通路から自らの部屋のある左側の通路に向かって走る。その曲がり角、勢いのままに曲がったナギは、誰かとぶつかってしりもちをついてしまう。

「いてー」

軽く尻をなでながら、立ち上がった。魔法障壁を張っているのに対してダメージは通っていないが、それでも痛く感じた。集中してみると、なぜか魔法障壁が解かれていた。それを疑問に思う。

「おい、ぼーや大丈夫か？」

声の方を向くと、そこには綺麗な金髪を背中に流し、少し鋭い美しく輝く青の目をした、十人中十人は振り向くであろう、引くほどの美女がいた。少し胸元の開いた紅いドレスを着て、欠片の心配も

感じ取れない冷たい眼でナギをみる。

「おい！ どうした！」

「—— あ？ っと、ああ、悪い、ぼーっとしてた」

ナギは見ほれていたのだろう。頭をふるふると振って女性の方を向く。

「？ まあ大丈夫ならいいが、自分ちじゃないんだから、少しは落ち着け」

「……」

そっぽを向く。女性はそれを見て、頭に怒りマークを浮かべる。

「まったく、これだから最近の餓鬼は……。おい、ぼーや。お前、自分が悪いことしたら謝れと親は教えてくれなかったのか？」

「悪い」

「……なんだ、その態度は。誠意が欠片もないじゃないか。これで私が怪我でもしていたらどうするつもりだったんだ？ 一丁前に魔法障壁まで張って。私じゃなかったら怪我してたぞ」

それを聞いてナギは少しだけ眉を動かす。

（魔法障壁が切れていたのはこの女が何かしたからか？ 触れたただけで、それも呪文も唱えずに魔法を消す……。いや、恐らくこの女も魔法障壁を張っていたんだろう。そして障壁同士の接触で魔力の多いこの女の障壁が俺の障壁を消した？ ということだ？ 最強の魔法使いである俺が張った障壁より、この女の障壁の方が強いって？ そんなバカな、俺は世界一の魔法使いになる男だ。今ではまだ最強だが、負けたことは一度もない。それも魔法使い相手なら全戦全勝、これで俺の無敵伝説は終了か！？ 早！！）

「おい、どうしたばーや？」

（いや、しかしこれは魔法使いの戦いであるのか？ こっちの魔法障壁はほんとに無意識に発してる弱っちいもんだし、この女は何かに警戒してて、マジな魔法障壁を展開してたのかも……。そうと決まれば——）

「おーい、だいじょぶか？」

ナギは顔を上げた。顔を近づけていた女は急に上がってきた顔をのけぞってよける。

「なああんた」

「ん？」

ブンツと拳を振り切る音とほぼ同時にパシツという何かを掴んだ音になる。ほぼ一秒以下で行われたそれは、ナギが女に殴りかかり、女はそれをやすやすと右手で掴み取ったのだ。

「これはどういうつもりだ、ぼーや？」

（やべ、こいつめちゃくちゃつえー。これは負けてもしかたがない……認めたくないけど）

女はナギの拳をキリキリと握る。確実に怒っているのだろう。口元は不自然に釣りあがり、眉はぴくぴくと痙攣し、そしてなにより言葉から威圧感を感じる。その姿は魔王のようだ。その言葉一つ一つにカリスマと呼ぶような威圧を放ち、その圧倒的な力で勇者たちに絶望を与える。彼女は魔王であっても、ナギは勇者ではないだろうが。ナギは冷や汗をかき、少し前の自分を恨んだ。

「チツ」

「アあ？」

舌打ちをしてしまった。クセである舌打ちを。これは彼女の怒りのボルテージを一段階上げるのには十分な行動だった。彼女は短気なのである。

「えっと、今の舌打ちはあなた様に喧嘩を売った数秒前の自分に向けたもんで……」

「ほう、やはり私に喧嘩を売っていたのか」

（墓穴ほった！？ 仕方がない、ここで暴れるのは少し気が乗らないが、俺もなるべく負けたくないし）

ナギは殴りかかった左手の中指に差してある魔法発動体を視認して、軽く呟いた。「火よ灯れアイルデスカット」の呪文を。

「あつっ！」

女は生身の手で握っているところからの攻撃に反応しきれず。そ

の手を離してしまった。

ナギはその隙に距離を取り、前かがみになる。女はナギの拳を握っていた手をぶらぶらと揺らしながらどこか楽しげにナギをみる。

「なかなかの発想だな。私の握力から逃れるとは。しかし、ぼーやお前の拳も焼けただろう」

女はこちらに掌を見せ付けるように揺らしながら言った。

「へっ、残念ながら、もう回復済みさ」

ナギも左手を握り、突き出すようにして見せ付ける。そこに火傷はない。

「無詠唱で回復魔法を使うか、子供にではずいぶん腕前じゃないかぼーや」

「さつきからぼーやだ、子供だ、俺はもう子供じゃねえ」

「大人なら自分が悪いことをしたらすぐに謝ると思うが？　これではお前は大人ではないなぼーや」

「子供じゃないから、大人って訳でもないだろ。俺は大人も子供も超越した存在だ！」

「ふふ、面白いことを言うぼーやだな」

女と、大人も子供も超越したナギは睨みあう。とはいっても、ナギが一方的に睨んでいるだけで、女の怒りはもう収まったようだ。

「ああ、ナギ。ここに居ましたか。全く、君が出てもう二十分を過ぎてますよもうすぐ着きますので部屋に戻りましょう。おや？　こちらの女性は……」

ナギからすると緊迫した空気の中、第三者が現れた。アルビレオ・イマである。ナギを探しに来たようだ。

「な！　貴様！」

「——ああ、やっぱりキティでしたか。懐かしい魔力がありましたがあなたのものでしたね」

「アルビレオ！　貴様がなぜここにいる！？」

「なぜ？　そりゃ、ウェスペルタティア王国のオスティアにいくためにですね」

「それは知っているわ！！——落ち着け私、こいつは慌てる私に興奮する変態なんだから……——」

「変態とは酷い言われようですね。私はただ、普段唯我独尊としている者が、慌てふためくのが好きただけですから」

「あつてるじゃないか！！？　くそ！　貴様といると、私が乱れる！」

「なんかエロいですね」

「黙れ！！」

女はアルビレオに回し蹴りを入れる。ドレスが邪魔をして少しばかりスローになってしまったが、それでもそれは鋭かった。アルビレオはそれを受けても何にもなかったかのようにニコニコとしている。

「あなたは相変わらずですねキティ」

「その名で呼ぶな！」

完全においていかれているナギはきょとんとしていたが、我を取り戻して声を上げる。

「おいアル！　この女、お前の知り合いか！？」

「はい、そうですね。彼女の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。結構有名な魔法使いですね」

「エヴァンジェリン？　それってエヴァン博士のことか！？　数々の魔法を生み出した賢者の？」

「その通り！　私がそのエヴァン博士だ！！」

ドレスの女——エヴァンジェリンは、その大きな胸を見せ付けるように胸を張る。

「すげー！　アル、お前ってすごいんだな！！　そうだ、エヴァン博士！　俺の仲間になってくれよ！」

「ん？　仲間だと？　どういうことだアルビレオ？」

「彼はナギ・スプリングフィールド。旧世界の魔法団体悠久の風所^{アラルプラ}属のグループ「紅き翼」の創立者であり、私達のリーダーです」

「悠久の風のグループのリーダー？　何を言っているんだアルビレ

才。こんな子供が戦場に行くというのか？」

「その通りですね」

「——貴様は、このぼーやが死んでもいいのか？」

空気が凍った。比喻ではなく、実際に周囲の気温が下がっていく。
「落ち着いてくださいエヴァ。あまり気温を下げると、この船が沈みます」

「ちっ」

真剣な表情でアルビレオが言うと、気温の低下はとまった。

「俺は死なねーよ」

「そういつて馬鹿な餓鬼が戦場に出て真っ先に死ぬ」

「ナギなら大丈夫ですよ、彼は強いですから」

「いくら強くても、今回の戦争では死ぬだろう。両国とも本気だ、早くてあと一年もしないで世界を二分にする戦争が始まるだろう」

——ブオオオーッと、到着を告げる汽笛が響く。それを聞いたエヴァンジェリンはまだ何か言いたげな顔をしていたが、顔をそらすとこういった。

「私は一週間オスティアに滞在する予定だ。そこであうこともあるだろう。私を仲間になりたいなら死なないという力を見せてみる」

「わかった。絶対に仲間にしてやる！ 楽しみに待ってやがれ！！」

ナギは歩いてくエヴァンジェリンを指差して宣言した。エヴァンジェリンはそれを聞いて笑い声を上げながら去っていった。

「ナギ、私達もいきますよ」

「おう」

ナギたちも詠春と合流するために客室に向かった。廊下から見える風景には宙を漂う浮遊都市「オスティア」が映っていた。

第六話 羽ばたくアラルブラ？（後書き）

というわけでロリじゃないエヴァ様でした。後々本編で語られますが、彼女が成長している理由はやっぱり主人公であるゲシユタルトが関係しています。今回、彼は欠片も出ていませんけど。

第七話 羽ばたくアラルブラ？・上

ウエスペルタティア王国の特徴ならびにその歴史は、魔法世界の中でも珍しいものである。さまざまな要因によって崩壊と建国を繰り返す魔法世界の国々の中で、その歴史は恐らく世界太古のものである。この魔法世界が生まれたところから存在し、なんでもウエスペルタティアの王族はこの世界を作り出した創造神の系譜だという。

少なくとも、世界各地に散らばる神話ではその血筋が証明されており、また、ウエスペルタティアの王族にしか発現しない、それもめつたにその存在は確認されない「完全魔法無効化」^{マジックキャンセル}と呼ばれる能力や、王家の者のみが操ることの出来る、気とも魔力とも違うが、どちらかといわれると気に近い性質の「王家の魔力」と呼ばれる特殊なものの存在が、その神話が事実であると裏付けている。そして、もう一つ、どちらかといえばこちらの方が一般的に認識されているウエスペルタティア王国の特徴であるもの。それは浮遊都市である。

——空を飛ぶ。

これは魔法使いたちにとってはとても身近なものであるが、その規模は自分ひとりが飛ぶような小規模なものや、飛行船などの中規模なもの。これは国一つが丸々中に浮くという超大規模なものであり、その原理は世界から発されている天然の魔法によるものらしい。これを参考にした技術が飛行船などの移動手段である。

そんな不思議なファンタジー^{アラルブラ}な国であるウエスペルタティア、王都オスティアに紅き翼一行は降り立った。王都の端に存在する空港には、大勢の人でにぎわっている。観光客や、それをターゲットにした商人、宿泊街の方で騒動があつたらしく、騎士の格好をした警備兵たちが、そちらに向かって駆けていく。人々は道を開き、中にはそれを野次馬するつもりなのか、彼らをおって駆けていく青年もいた。そんな活気付いた街に飛行船から降りたナギはきよるきよるとあたりを見回している。

「おお！　ここ、来たことあるぞ！」

「おや、ナギはオスティアに来たことがあるのですか？」

「ああ、オヤジと一緒に小さいころ一回だけな」

「ほう、すごいものだ。なこの世界は。空を飛ぶ都市とは奇妙なものだ」

三人は宿泊街に向かって歩き出す。

「ところで、そのエヴァンジェリン殿？　だったか、彼女はいないのか？」

「彼女なら城下街にある有名な人形店でも見に行っているのではないかと。彼女は人形使いでもありますから」

「たしか……「真理の提供者」だったか？　さまざまな魔法を作り出し、世に送り出しているらしいな」

「ああ、魔法使このすじいたちの間だと有名なだけ。世界に新しい法則を作り出すマギウス、その魔法使い版つてところか？」

そこで会話は途切れた。ナギは周囲をきよきよと、アルビレオは目を薄めてのんびりと、詠春もこの見知らぬ街の風景が珍しいのだろう。ナギのようにきよきよとしていた。三人は並んで歩く。詠春の横を子供が駆けていった。それを詠春はやさしい表情でみる。何かを思い出しているのだろうか。

「？　どうかしましたか、詠春？」

「いや、なに、少し私の故郷を思い出してね」

「故郷？　ニッポンの京都だろ？」

「ああ、昔ながらの風景の残る街。最近は開発が進んで私たちの本拠地付近以外は近代的になってきてしまっただけ。世界が違ふとはいえ、メガロメセンブリアのように近代的ではなく、中世的なこの場所が気に入ってしまったのかもしれない」

詠春は少し笑みを浮かべた。その姿は照れているように見える。

「ふーん、詠春は古いものが好きなのか」

「たしかにそうかも。歴史を感じるこのことができるものが私は好きだ」

「ウエスペルタティア王国というか、このオステティアは何でもこの世界が出来た頃からあるらしいですからね」

「すげーな、それ」

他愛のない話を交わす。出会って一ヶ月もたっていない三人だが、その仲は良好である。

「お、ここでいいんじゃないか？」

「そのようですね」

ホテル・ブルーリオン、それが悠久の風から紅き翼アラブルに与えられた宿泊施設。事前にアルビレオが渡されたのは写真と住所の書かれた紙切れ。それをアルビレオは取り出して二人に見せるようにした。

「写真でみると現実で見るのとじゃ、結構違うんだな」

「全くですね、ぜんぜん外形が違うじゃないですか」

「どれどれ…… 本当だ。—— って、これ外形が違うとかのレベルじゃないだろー！」

詠春は実物と写真とを見比べて一瞬二人の思考に乘せられたが、すぐに正気を取り戻し突っ込みを入れる。

「まあ、わかつてるよ」

「ええ、現実逃避くらいさせてください……」

「気持ち解るが……」

何度も写真と実物を見比べる。アルビレオは近くを歩いている現地人らしき人物に話しかけて紙に書かれた住所があっているかを聞いている。そして肩をおろして戻ってきた。

「ここであつてるみたいですね……」

「はあ、まあ入ろうぜ、中は見た目よりいいもんかもしれないぜ」

「そうだな、それに賭けてみよう」

アルビレオは写真を投げ捨てた。そこには高級な城をモチーフにしたであろう綺麗で高貴な雰囲気建物が写っている。ナギとアルビレオは目の前にある建物に入った。城をモチーフにしたであろう—— が、それはすでに廃れた古城のようにしか見えない。建物の右上半分が消失し、雨をしのぐはずの天井はなく、人が住むとして

も右側にしか住めないだろう。たしかにそれは写真に写る建物の面影は残っているが、この写真を撮ったのは何時のことだろうか？西洋の城のような場所に宿泊できると、楽しみにしていただけ、詠春の心の中の落胆は結構なものだった。

「——まあ、こんな場所に泊まれることもめったにないか……」

詠春はそういつてナギたちを追ってすでに扉のない入り口をくぐって中に入った。

「すいませんが、ここがこの住所のホテル・ブルーリオンであっていますか？」

アルビレオは入ってすぐのカウンターに座る禿頭の男に言う。男の身なりはお世辞にも良いものとは言えない格好でヤル気なさげにカウンターにひじをのせて腐った魚のような目でどこかを見つめていた。

「——……ああ、冷やかしながらえつてくれないか」

数秒間を空けて、男は淡々とそう告げた。その反応にアルビレオは困ったような顔をする。

「えっと、我々は一応ここに宿泊を予約してあるはずのものなのですが……」

その言葉に男の瞳に輝きが戻る。

「悠久の風の紅き翼アラルブラの皆様ですか！？」

「え、ええ、そうですか」

「失礼ですが、身分を確認できるものをお持ちでしょうか？」

「はい、これを」

アルビレオは悠久の風から普及されている身分証明書を見せた。

これは、悠久の風に所属する人間がなにか事件に巻き込まれたときや、身分を証明するために各自に配られたものである。見た目はまるつきり自動車免許証だ。

「……はい、確認しました。部屋は右手の廊下の一番奥にある16号室になります。それでは、オスティアをお楽しみください」

男はそういつて深々と頭を下げた。そして、後ろを向いてカウンターの奥に消えていった。

「内部は思ったより汚くはないな」

詠春が入ってきた。思ったよりも綺麗なままだったので驚いているようだ。

「ナギは？」

「あれ？ どこにいったんでしょうか？」

「おーい！ 速く来いよ！！」

右の廊下の方から声が聞こえてくる。アルビレオと男の会話を聞いて、一足先に部屋に向かったようだ。二人は苦笑した。一ヶ月共にいるが、稀に見せる子供の面。普段は魔物狩りなどで前面にでて戦っているが、やはり子供だ、と。

奥に歩いていくと、内装はだんだんと綺麗になっていく。こんな状態になっても男は掃除を止めなかったのだろう。何故こんなことになったのかは気にかかるが、それを気にすることもない。アラブルブラ紅き翼はここに泊まるだけなのだから。

ナギは最奥の扉の前に立っていた。「No.16」と書かれたタグが駆けてある石で出来た扉。それにはドアノブがなく、ナギはどうつてあけたものかと、顎に手を重ねて思考しているようだ。

「なあ、これってどうやってあけるんだ？」

思考の結果、答えが見つからなかったのか、それとも開け方を知っているであろうアルビレオが来たからなのか、ナギは顎に重ねた手を頭に移動させてそこを搔く。

「ふふふ、これは身分証明書をここに重ねればいいのですよ」

アルビレオは懷から先ほど男にも見せた自分の身分証明書を取り出す。そしてそれを扉の一部にある不自然に盛り上がっている正三角の石に重ねると、ピピピツと言う電子音と共に案外滑らかに石の扉は滑り中に入れるようになった。

「すげー」

「そうだな。不思議な技術だ、魔法には驚かされてばかりだ」

ナギと詠春はそれを見て心底関心した顔で頷いた。アルビレオはそれを見て怪しい笑みを浮かべる。

「この扉は私の身分証明書でしか開きませんので、外に出て戻ってきたら念話でもして私にあけるようにいつてくださいね」

「おう」

「了解した」

ナギと詠春は懷からカードを取り出す。それはまるでタロットカードの様であった。ナギのカードには数多の本をバックにしたアルビレオが写っている。これはナギを主としたアルビレオと結んだ^{バグ}契約カードである。ナギの持っているのはマスターカードであり、アルビレオの持つ従者カードに向けて念話をしたり、従者を召喚したりする機能がついたものである。そして詠春の持つカードには夕風^{バグ}に茶色の寂びれたマントをつけた彼自身の姿が写っていた。これはナギを主として詠春の交わした従者カードで、それはアーティファクトを召喚できる特殊な^{バグ}契約カードであった。彼らは^{アラブルブラ}紅き翼結成時に友情の証として膨大な魔力を持つナギを主として契約したのである。結果としてアルビレオのカードも詠春のカードも超が付くほどのレアアーティファクトが付いてきたのであった。ちなみにナギはそれを若干羨ましげに見ていたという。

「では、今日はこれで解散と言うことで。私は夕方までここでのんびりしています」

部屋の内部は豪華の一言であった。天蓋付きのベッドが三つ並んでもまだ部屋の広さはあまりがあった。外見からは予想できないほどの光景。アルビレオは一番窓際にあるベッドに腰掛け、何処からか本を取り出して読み始めた。

「では私も街を見て周ってこよう」

詠春もそういつて出口に向かっていった。

「あ！ 俺も行く！」

ナギはそれを追うように駆けていった。

ナギと詠春はしばらく行動を共にしたが、詠春の行く建物めぐりに飽きたのか、ナギは一番賑やかである城下街に出て行った。ここはウエスペルタティアの王城と飛行船の空港を繋ぐ一本道に観光客をターゲットとしたこの都市に元々住まう商人たちが開く店が立ち並んでいる。人が一種の川のように流れ歩く。さまざまな人々の声が混ざり合って聞こえてくる。客を呼び込む土産物店の声や、「紛争地帯の難民の為に募金をお願いします」と書かれた看板を掲げ、それと同じことを言っている女性の声や、一緒に歩く友達と何が良かっただ、これが駄目だっただと、会話をする観光客グループなど。ナギはこの活気とした街並みが気に入った。自分の住んでいたのはウェールズの山の奥。人目に付かない魔法使いの隠れ里。静寂としたその場所はこのようなように明るくはなかった。

「——そう言えば、エヴァン博士もここにいらっしゃるじゃねーのか？」
ナギはポツリとつぶやいた。たしかアルビレオの言ったエヴァンジェリンの向かったであろう店。たしか有名人形店といった。ナギは人形というものに欠片の興味もない。なので有名人形店と言われるてもそれがどの店のことかなど、全く解らないのだ。

「エヴァン博士……ね、」

ナギの頭に再生される、紅いドレスを来た美女の姿。その冷たい瞳は真っ直ぐこちらを見据えている。ナギは少し嫌な思いをした。自分を見下すようなあの目が気に入らない。

何かどす黒い感情がナギの中に生まれた。

「何を考えてるんだ、俺！　しっかりしろ」

パンと頬を叩くと、その感情は晴れていく霧のように拡散していった。ナギは少し強めにたたいた所為で赤くなってしまった頬を撫でる。

「なにやってんだよ俺、かっこ悪いな……」

「なにがかっこ悪いんだ？」

ナギの独り言に答えが返ってきた。それはどこかで聞いたような声。

「あんたは……」

「さっきぶりだなぼーや」

それはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルであった。飛行船で見た格好とは違い、まるでどこその社長秘書のような高級感溢れる黒のスーツ。胸には緑色の髪をしたゴスロリのような服を着た人形がその口を吊り上げていた。

「もう買い物は終わったのか？」

ナギはゴスロリ人形を見ていった。一瞬その人形と目が合う。無機質なその瞳は全てを映しているような、その真逆、何も写っていないような。嫌な感じがしたので、ナギはそれから目を離れた。

「うん？」

「オスティアの有名人形店だっけ？　そこに行っただんじやないのか？」

「その通りだよ。アルビレオに聞いたのか？」

「まあ」

エヴァンジェリンはため息を吐いた。

「あの男もお喋りだな……。行っただには行っただが、たいした物はなかったな。どれもどこかで見たような作りをした物ばかり」

「よくわかんねーや」

「そうか、まあ男にはわからないものなのかもしれないな。そうだならばーや。お前の好きな魔法の話でもするとうか？」

「？　なんだよ突然？」

「いいから来い」

エヴァンジェリンはそういつてすたすたと歩き始めた。ナギは疑問を抱きながらエヴァンジェリンについていく。数分歩いて付いたところは城下街の外れにある木製の一軒家。扉には「Thermopolium」の文字が書かれた木札がかけられている。

「付いたぞ」

エヴァンジェリンが店の扉を開く。内部はレトロな雰囲気漂う喫茶店であった。客は少なく、たったの三人であった。互いに干渉するようで、店内に流れるこれまたレトロな曲を聴きながらコーヒーを啜っている。

「暖かいコーヒーと、そうだなミルクでも頼む」

「少々お待ちを……」

エヴァンジェリンは店主であり、唯一の店員である深い皺を持つ白髪の男のいるカウンターに席を着くと、飲み物を注文した。

「俺は紅茶がよか……」

「もう頼んでしまった、さっさと入ってこないお前が悪い」

ナギは数秒店の入り口で固まっていたが、エヴァンジェリンが注文を終えた後、彼女の隣の席に着いた。

「さて、コーヒーが来るまで少し話をしようか」

「魔法の話だろ？」

「その前に聞いておきたいことがある」

「？　なんだ？」

エヴァンジェリンは体をナギの方に向けた。

「お前はこの時期に悠久の風とは限らず、傭兵組織に所属すれば恐らく怒るであろう戦争に引っぱりだされるのは解っているだろう？　アルビレオが言うにはお前はなかなかの魔法使いらしいじゃないか。だったら戦場に出るのは当たり前、子供であろうが関係ないだろう。なのに何故お前は悠久の風に入っただんだ？」

「そんなの決まっているだろ、俺の力を試すためだよ」

「――、まさか本気でそんな理由で」

「そうだ。俺は世界一の魔法使いになる男だ。世界一になるにはまず世界に自分のことを知らしめなければならない。戦争が起こりそうなのは偶然だけど、どちらにしろ俺は^{まほうせかい}この世界に行くって決めたときから戦うことになっているんだ」

「戦うことになっている？　それは誰が決めたことだ。『なっている』ではなくて『する』だろう。それは自分のことしか考えていな

い——いや、自分のことすら考えていない愚か者の意見だ」

「たしかに自分のことしか考えていねーかもしれねーが、自分のことはよくわかってる」

「貴様、死ぬぞ」

「死なねーよ。俺は最強なんだから」

「最強だと？ 貴様は飛行船で私に負けを買ったではないか？」

「俺は最強だけど無敵じゃない。一度負けても、二度負けない。同じことはやらないのが俺の主義だ」

「なら試してみるか？」

「上等だ！」

「店内ではお静かにお願いします」

店主の一言で二人は口を閉じた。コーヒーと紅茶が運ばれてきた。コーヒーをエヴァンジェリンの席に、紅茶をナギの席に店主は置く。「ごゆっくり」

店内の音は流れるレトロな曲と、客のコップの音だけになった。

エヴァンジェリンはコーヒーを一口飲む。

「相変わらず店主マスターの入れるコーヒーは上手い」

コトンとカップを受け皿に戻す。ナギは紅茶が運ばれてきたことに驚いている。気の利く店主のようだ。

「うめえ」

懐かしい味だった。紅茶の味にうるさい父に育てられたナギの舌は、上手い紅茶になれてしまい、メガロメセンブリアの紅茶など飲めたものではなかった。一ヶ月ぶりの上手い紅茶にナギは故郷を思い出した。

「そうだろう。ここの店主マスターの入れるものは紅茶もコーヒーも変わらず上手い」

「オヤジに入れてもらった紅茶と同じくらい上手いな」

「貴様が死ぬばそのオヤジは悲しむぞ？」

「そつかもな……」

ナギは俯く。自分の行動が正しいものなのか。やはりここに来る

には少し早すぎたのか。さまざまな思考で頭が埋まる。答えはでない。エヴァンジェリンは答えを出すまで待つていてくれるのか、コーヒーをちびちびと味わいながら飲んでいる。

エヴァンジェリンが二杯目のコーヒーを飲み終えたところ、ナギは顔を上げた。ナギの紅茶は考えているときに飲んでいたのだろう、空っぽだった。

「俺は戦う」

「ほう、それはオヤジが悲しんでも構わないということか？」

「いいや、俺は死ぬつもりもないぜ」

「だが、貴様程度が戦場に出ればすぐに死ぬぞ」

「死なないね、俺は最強なんだから」

その目は力強い輝きを生み出している。どこかで見た目。この目をしたものはなんだかんだで最後まで死なない。長い長い時代を生きるエヴァンジェリンはその目を見て、ため息をついた。

「そうか、そこまで言うなら仕方がない」

「何を言われたって俺はもう止まるつもりはないぞ」

「別に止めるつもりはないさ、ただ——」

エヴァンジェリンは思わしげにそこで区切った。カップの底に少しだけのこるコーヒーを一気に飲み込む。口の端からはまるで吸血鬼が血を吸った後のようにコーヒーがたれていた。それをナプキンでふき取る。

「——お前が戦場に出るまでに生きていればだがな」

ファンタズマゴリア

——幻想世界に共に行こう。

エヴァンジェリンの目は怪しく紅く光り、それを見ていたナギの意識は消え去った。

第八話 羽ばたくアラルブラ？・下

ファンタズマゴリア

幻想世界。その名の通り、実在しない幻想の世界。超高位の魔法であるそれは、魔法使いたちに知られている割には会得の難しさから使用できる魔法使いは少ない。幻術とはいえ、世界を造るその魔法は、造りだすために必要な強大な魔力、幻術であるがゆえに必要な発動者の精神力と想像力。並大抵の魔法使いでは逆に自分の造った世界に囚われ、肉体だけが現実に残り、一生植物人間だろう。

「何だよここ……」

意識が浮上したナギの視界には、青い広大な海。その海を見渡せる塔のような場所に彼はいた。

「ここは私の造りだした世界。幻想であるここなら、加減をする必要も、躊躇する必要もないだろう」

声の方向には宙に浮くエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
の姿があった。服装は喫茶店にいたときと同じ黒いスーツ。長く綺麗な金髪は重力に逆らうようにふわふわとしている。

「どういふつもりだ？」

「貴様の願い通り自分の実力を証明する場所を与えてやっただけだが？ 私は魔法開発者であると同時に最強クラスの魔法使いでもある。私に勝てばそれだけで世界一に一步近づくわけだ」

「そうか、そうだな。ならやろう、今すぐやろう、泥沼になるまで戦い合おうぜ！！」

優雅に宙に舞うエヴァンジェリンにナギは破壊属性の魔法の射手を打ち込む。ナギが得意とする雷属性のそれは、真っ直ぐにエヴァンジェリンに向かって飛んでいた。

「ふん」

エヴァンジェリンはいつの間にか手に持っていた鉄で出来た扇でそれを払う。すると、魔法の射手はパキンと碎けるように消失した。

「スマツシュ・スラツシュ・オーゲイション！ 来れ、虚空の雷薙ケノデイトス アストラブサトー デイオス・テュコスぎ払え——雷の斧！！！」

魔法の射手による牽制からつなげる雷の斧によるコンボ。詠春との戦いの時にも使った、使おうとしたナギ必殺のコンボだ。

「ダメ押しだ、喰らえ！ 白き雷！！！」フルグラティオー・アルビカンス

雷の斧によつて煙が起つており、その様子は見ることはできないが、恐らく当たつたであろう。

「——氷爆（ニウイス・カースス）」

「んな！」

唐突にナギの隣から発生した冷氣と爆風の衝撃に、ナギは横に飛ばされる。

「ふふふ、今のは効いたぞ」

笑いながらエヴァンジェリンが空中から地面に降り立つた。

「……なんで効いてないんだ」

「いいや、効いてるさ、ただ少し足りなかったな」

無傷のエヴァンジェリンはナギに近づいてくる。ナギは立ち上がった。そして足に魔力を込めて一瞬でエヴァンジェリンに近づき、殴りかかる。その手には雷がバチバチと鳴いている。

「甘いな、その程度の速度じゃ、カウンターは余裕だ」

エヴァンジェリンはその拳をすれすれで避け、ナギの顔を殴りつける。

「げふっ」

ナギは面白いくらいに吹っ飛んだ。

「そら、ダメ押しだ！ 氷神の戦鎚！！！」マレウス・アクイロニース

エヴァンジェリンは両手を上に上げて魔法を発動する。それは大きな氷の球体。エヴァンジェリンの腕の動きと連動するように動き、ナギの頭上に降ってくる。

ズドン！ 激しい衝突音と共に魔法はナギに激突した。

「なかなかの魔法だったが、私には届かなかったようだな。手加減はしてやった。死んでなければいいな」

エヴァンジェリンは後ろを向いて空を見上げる。

「ヤクラーティオー・フルゴリス
雷の投擲……！」

「な……？」

背後からの投擲。槍をかたどった魔法の雷はエヴァンジェリンを貫いた。

「俺を倒すには少しばかり手を抜きすぎじゃねーのか？」

エヴァンジェリンの放った氷神の戦鎚から声が聞こえてくる。ペキペキと音を立てて、魔法で作られた氷塊は粉々に粉碎された。そこからは口から一筋の血筋を流したナギが出てきた。目立った傷はなく、その姿を見たエヴァンジェリンの目は驚愕が見て取れる。

「ごふう、お、驚いた、な。まさか、その、て、程度の傷、で、済む……とは……！」

口から大量の血がでる。それも仕方がない。魔法で出来た槍が体を貫通しているのだ。すでに魔法は消えたが、エヴァンジェリンが傷ついたという結果は消えない。傷口からも血が出ていれば致命的だったかも知れないが、高電圧で発せられた雷の投擲という魔法によつて傷は焼かれ、血は流れていない。

「種も仕掛けもねー技術だ。これはただの瞬動の応用だよ」

「しゅん、どう……だ、と……？」

「ああ、そうさ。いつもは足で発動する瞬動を体全体を使つてやつただけだ」

「ごほごほ、体全体でだと？　——そういうことか。なんだ単なる障壁じゃないか」

「その通り。一瞬で発動できる瞬動と、タイムラグが少しある障壁。デフレクショあの時は風楯じゃあ間に合わなかったからな」

「ふう、そういうことか。納得がいった」

「——っ」

気が付くと、エヴァンジェリンの体の傷は跡形もなく消え去っていた。ナギは驚きに目を見開く。エヴァンジェリンはそれを見て愉快げに笑った。

「ふふふ、実は私は吸血鬼なのだよ……」

「……っは！ 真昼間から泥水コトキ飲んでる吸血鬼なんぞ、笑いものだぜ！」

ナギの言葉にエヴァンジェリンは引きつった顔をする。

「……—まあいい。続きをはじめるとするか……」

「いいぜ、さつさと来いよ！」

ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス

——雷の暴風！！！！

ニウイス・テンベスター・オブスクランス

——闇の吹雪！！！！

同系統の属性複合魔法がぶつかり合う。方や雷と暴風の奔流。方や暗闇と吹雪の一撃。どちらも同威力の魔法。しかし、ほんのわずかな力量の差で、エヴァンジェリンの闇の吹雪はナギの雷の暴風を押し返した。それは経験。エヴァンジェリンが効率的に魔力を運搬しているのに対して、ナギの魔法は暴力そのもの、力任せなものが多い。それでもエヴァンジェリンの魔法と競い合うことが出来るのだから、ナギの魔力の異常性はよくわかる。しかし、やはりエヴァンジェリンの方が一枚上手だった。

デフレクショ
「くそ！ 風楯！」

それは盾。右手に集った風の塊は、ナギの雷の暴風との激突で弱体化した闇の吹雪を完全に防ぎきった。

「そら！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、——来れ氷精（ウ
エニアント・スピリトゥス・グラキアーレス）エクステンダントウル・アール・スプレッ
ム・エト 大気に満ちよ白夜の

国の一凍土と氷河を（グラキエーム・ロキー・ノクティス・アルバ
エ）——」

「ちい！ スマッシュ・スラッシュ・オーゲイション！ 光の精霊
ルキス コエウンテス イニミクス・サギアント 1001柱、集い来たりて敵を射て！！！」

エヴァンジェリンは詠唱魔法を放とうとするが、完成ぎりぎりのところでナギの魔法の射手によって妨害される。

「1001柱……！　そこまで来ると大魔法と変わらん！」

エヴァンジェリンは瞬動を行い、その攻撃を避ける。怒涛の輝きは追尾式だったらしく、エヴァンジェリンをしつこく追い掛け回した。

「しつこい奴は嫌われるぞ！　凍てつく氷枢……！」
ゲリドウスカプルス

エヴァンジェリンの目の前に氷の柱が出来る。それは魔法の射手を包み込み、凍らせた。

「すごっ！」

「そうだろう！　さて、次だ！」

——リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、契約に従い我に従え氷の女王……！！
イクタユ・スタリーネ・バシレイア
ト・シュンボライオデイアー・コネット・モ

「最大魔法か、ならこつちも——」

——スマッシュ・スラッシュ・オーゲイション、契約に従い（ト・シュンボライオン）
ディアー・コネット・モイ・バシレク・ウーラニオー・ノーン 我に従え高殿の王……！！

エビゲネー・アイガー・ニオン
エレボス
「来れとこしえのやみ……！」

「来れ巨神を滅ぼす——燃ゆる立つ雷霆（ケラウネ・ホス・ティテーナス・フティレイン）……！！」

「っはは！　ぶつけ合いでくるのか！　いいだろう！　——えい
ハイ
えんのひょうが……！」
オイニエ・クリュスタレ

エヴァンジェリンの右腕に冷気が集う。それは結構な距離を離しているナギの位置にまで届くほどのマイナス。

「百重千重と重なりて走れよ稲妻あ——」
ヘカトンタキス・カイ・キリアキス
アストラ・フサター

ナギの右腕に轟音放つ雷が集う。それは結構な距離を離しているエヴァンジェリンさえもが隣に電灯があるかのように、顔が光りで白く染まる。

「全ての命ある者に等しき死を……」
バーサイス・ソーサイス
トン・イソン・タナトン
ホス
アタラクシア 其は 安らぎ也——
ミケー・カタストロフ・エー
コス “お

わるせかい”」

キーリブル・アストラベ

「——千の雷——！」

巨大と巨大がぶつかり合う。それは先ほどの雷の暴風と闇の吹雪の激突がお遊びに見えるほど。それも仕方がないのかもしれない。二人の放つ最大魔法とは、雷の暴風や闇の吹雪の位置するレベルの魔法から単純計算で10倍以上は威力のある魔法だ。10歳の子供が撃てるはずのない最大魔法。それを撃つ十歳のナギにエヴァンジェリンは恐怖に似た感情を覚えた。自分の10歳の頃というのは、その体質——吸血鬼の真祖という最高級の魔法使いとしての体質を持っていても、闇の吹雪が限界だった。

（くそ！ どうして最大魔法が使える！ 所詮子供の魔法と思ったが、私の魔法を押しているだと！！ 先ほどの魔法は私との経験の差で私が打ち勝った、だとしたら、こいつは今、私との戦闘でその差を縮めているのか！？ なんだその出鱈目は！ 瞬動の応用といい、こいつはおかしいぞ！）

エヴァンジェリンは腕に込める魔力を増やす。エヴァンジェリンの使っている魔法は改造に改造を重ねたエヴァンジェリンオリジナル改造魔法。それは遠隔操作、途中で魔力を込めることが可能になるチートだ。

「へへっ！ いいぜ、いいぜ！！ 最高にハイツ！ って奴だア

エーミッタムキーリブル・アストラベ

「——解放、千の雷——！ おら、これで二倍だ——！」

「んなにいい！ どれだけ魔力があるんだ、このバグめ！！ なら私は二乗だああああ——！」

ナギは事前に詠唱しておいた千の雷を解放する。それに対抗するために、エヴァンジェリンは魔法にかける魔力をさらに増した。ちなみに二乗というのはナギに対抗するための嘘であり、実際は三倍程度だろう。

「ふふふ、実はもう一個ためておいたんだ！ ——

エーミッタムキーリブル・アストラベ

解放、千の雷

「——これで最初の三倍だぜ——！」

「なに——！」

エヴァンジェリンの魔法が再び押され始める。エヴァンジェリンはもう魔力をつぎ込むことは出来なくなった。残りの魔力が結構ヤバイのだ。

「いっけえー！ー！！！」

「——！！！」

ナギの魔法はエヴァンジェリンの魔法を打ち破り、直撃した。幻想世界、ナギたちの戦っていた城は崩壊し、そこには海と島が残った。ナギは瓦礫まみれになっている島に下りる。

「ふう、疲れたな……」

ナギは近くにある瓦礫に腰をかける。その表情はまだ余裕があるようだった。

「しかし、強かったなエヴァン博士は……、ってあれが直撃って下手したら死んでないか！？ 大丈夫かな」

——ガキンッ！！

「！？」

唐突に、エヴァンジェリンのいたほうから何かが急に凍ったような音がした。それと同時に肌を刺すような冷気が白く霧のように具現し世界を覆う。

「やるなぼーや、私にこれを使わせるとは——」

「なんだと！？」

がしやりがしやりと鎧武者の歩くような音と共に白い霧の中からエヴァンジェリンが現れた。その姿は禍々しく、白い肌の両頬に闇色の文様が現れている。それはシンメトリーになっていて、どこか氷の結晶を思い出すデザインだ。

「ふふふ、その顔は疑問に思っているな？ ぼーやの最大魔法が直撃したにもかかわらず、傷一つ負っていない私を」

「その通り、どうなってんだ？」

「答えは簡単さ、あれを试试看」

エヴァンジェリンは指を上空に向ける。ナギはそれに釣られて上を見た。そして言葉を失った。

「なっ——」

空中には凍りついた塊が浮いていた。それは雷のようにぎざぎざと、先端の方は碎けて消えている。

「あれはお前の千の雷だ」
キリブル・アストラベール

「魔法を凍らせるだ！？」 その前にそんなことが出来るほどの魔力があんたに残っているのかよ！！」

「魔力ならもうほとんどないぞ。あと闇の吹雪を三回撃てるかどうか程度かな」

「ならなんで！？」

「そりゃ、これが魔法じゃなくて技術だからだ」
「技術だと？」

「そう、博士らしく教えてやろうじゃないか。これは魔法使いの上位存在「精霊使い」スピリット・ユーザーと似たようなものだ。」「精霊使い」スピリット・ユーザー、これも知ら

らんだろうから教えよう。精霊使いとは魔法使いの限界である魔力量というものを超越した存在のことだ。直接精霊を操り、魔力を介さず魔法より強力な精霊術を使うもの」

「それじゃあ、あんたは氷の精霊術とかで魔法を凍らせたのか？」

「いいや、精霊術であっても魔法を凍らせるなどといった奇想天外なことは出来ん。だいいち私は精霊使いスピリット・ユーザーですらないからな」

「じゃあなんで！？」

「これは呪いみたいなものさ」

「呪い？」

ナギは腕を組んで何かを思い返すような顔をしているエヴァンジェリンを見る。

「そう、これは龍殺しの呪い。それも古龍エインシエント・ドラゴンと呼ばれる龍の原種を殺したときに貰った特別性のな」

——龍殺し。それは英雄録にも登場する偉業の一つでもあるもの。なかでも有名なのは旧世界のジークフリートなどだろう。彼は

その勇気と力で悪竜を退治した。そのとき、切りつけた傷から吹き出た血を浴びて彼は不死になったのだ。

「私が殺した、殺してしまった龍の名は「エインシェンヨサゴシカイム古龍・龍山」、龍山山脈に住まう氷結龍山」

「そりゃ、めちやくちや大物じゃねえか、下手したらそいつは神じゃないか」

「そうだな。運が良かったんだ、あの技法がなかったら勝てやしなかった」

「あの技法？」

「私の生み出した世界に公表しちやいない特殊な魔法だ」

「魔力がないんじゃないか。こんど、俺の仲間になったときにも教えてもらうからな！」

「何時私がお前の仲間になることになった！！」

「へん、そりゃ飛行船の中でだろう？俺が死なないことを証明できりや仲間になるって。事実今、俺はあんたを押している、これだけ出来りやしないだろう？」

「そういえばそうだったな」

エヴァンジェリンは何かを考えた後、ナギに返事をする。

「彼を探すのにちょうどいいのかもしれん。解った仲間になろう」

「おっ！」

「おまけだ、今から私に一撃でもいれられたなら古龍を倒した私の究極技法を教えてやるう」

「よっしゃ！ヤル気満点！行くぜ！！」

「こい！ナギ！！」

ナギはエヴァンジェリンに向けて無詠唱でフルグラティオー・アルビカンス白き雷を放つ。しかしそれはエヴァンジェリンに届く前に凍てつき、エヴァンジェリンの

蹴りで粉々に砕け散った。

フロース・アルマトールム・テイ「無駄だ！私の「氷神の鎧」をその程度の魔法では貫くは出来んわ！」

エヴァンジェリンは飛び出し、ナギに向かってけりを放つ。それ

をナギは瞬動で移動して距離をとりながら呪文を詠唱した。

「威力が足りないなら、これでどうだ！ フラグランディア・ルビカンス 紅き焰！！」

氷には炎を。そういう単純な思考でナギは炎属性の魔法を放つ。

「そう来たか、だが無意味だ！」

しかし、エヴァンジェリンの氷神の鎧のフロース・アルマトウールム・デイ前に一瞬で凍ってしまう。

「炎を凍らす氷って……！」

「不条理だろう、不思議だろう、絶望的だろう、圧倒的だろう！

だが、それが私の氷神の鎧だ……！」フロース・アルマトウールム・デイ

エヴァンジェリンは氷属性の魔法の射手を無詠唱で放つ。ナギに向かつて直進する二十九の魔法の矢。鋭くナギの心臓目掛けて飛翔するそれをナギは障壁で防ぐ。ナギは疑問を抱いた。

「次だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ライラック、ウェニアント・スピーガチヤヌーレス・オブスク
ランディア・オブスクラビオトニテンバスター・リス来たれ氷精闇の精、闇を従え吹雪け常夜の冰雪っ！ ニウイス・テンベスター・オブスクランス 闇の吹雪……！」

先ほどこれを三回撃つのが限界といった闇の吹雪を撃つ。威力は

雷の暴風とぶつけたときとなんら変わらずナギに襲い掛かった。

デフレクシオマークシエクスバンド「風楯、最大展開……！」

普段使う風楯の倍ほどの魔力をつぎ込み、完全に闇の吹雪を無効化する。衝撃は思った以上に大きかった。そしてナギの疑問の答えがでた。

疑問を確信にするためにナギは無詠唱で氷属性の魔法の射手を一矢放つ。

「全く、器用貧乏ではなく、器用金持ちといったところか！」

エヴァンジェリンの氷神の鎧を素通り他の障壁に阻まれ、魔法の射手は消え去った。それを見たナギは満面の笑みを浮かべた。

「見つけたぜ！ その障壁の弱点……！」

「なに？」

「そいつの弱点は「氷属性の魔法は凍らせない」だ！ あんたの放つ魔法は氷ばかり、しかも、俺の氷の魔法は避けやがった。闇の吹雪だって、「闇」の部分が凍りつき、氷の魔法としての威力が相当強くなっていた」

「ふん、よく気が付いたな。その通りさ、この障壁の弱点であり利点はそこだ」

「だったらそこについて氷の魔法で攻撃すれば、一撃当てるくらいなら…」

「残念ながらそれは無理だ」

「なに？」

エヴァンジェリンは笑いながら胸元から氷の結晶を模した首飾りを取り出してナギに見せる。

「こいつは氷属性の魔法を弱体化させるアーティファクトさ、最大魔法くらいじゃないと、私が無意識に発している障壁で十分防げるレベルまで弱体化させるものだ」

「――」

勝った、とエヴァンジェリンは思った。そしてナギも勝ったと思う。このままエヴァンジェリンが油断していてくれれば、俺の勝ちだ、と。

「やってみなきゃわかんねー！ どうせなら俺のオリジナル魔法でいつてやる！ スマッシュ・スラッシュ・オーゲイション！！」

「来い！ 見せてみる、お前のオリジナルを！」

エヴァンジェリンは余裕綽々にナギを見下すように見る。

「――炎の剣と氷の弾丸。グラディウス・イグニス・グラキエス・スビルリナ螺旋の軌道は捻じ曲がり――」ファルスス

その呪文は歪だった。まるで素人が辞書を片手に言葉の羅列を並べたようなもの。エヴァンジェリンには意味が解らなかったが、思い至る。

（これが子供特有の「ぼくのかんがえたさいこうにかっこいいまほうえいしょう」というものか！？）

そんな思いもしらずナギは詠唱を続けた。

「――炎は凍り、氷は燃える！」フリーグス・イグニス・エクス・ロ・グラキエス

「ほう」

そんな呪文であったが、ナギの挙げた両手の先には冷気が集い、氷の塊を形成していく。

「行くぜ！ デュアル・マジック 二重魔法！—— キムラス・グラキエス・エクスロー 燃える氷塊！！！！」

ナギは両手を振り下ろす。それはエヴァンジェリンの放った魔法「氷神の戦鎚」にそっくりであった。もしかしたらそれをモデルにして作った魔法なのかもしれない。

「ふっ、来い！」

エヴァンジェリンは手に障壁を集め、受け止めるつもりでいるようだ。ナギの魔法は氷神の鎧を通りすぎ、エヴァンジェリンに接触した。

「いまだ！ キムラス・エクスマレション 炎塊、発現！」

「なに！？」

エヴァンジェリンは反応できなかった。だれも想像できやしないだろう。氷の塊が炎上するなど。エヴァンジェリンの手に接触した瞬間にナギの魔法は形を崩し、燃え上がった。エヴァンジェリンはそれを避けることは出来ずに諸に食らってしまった。

「あつ、あつつー！」

イーサリオン
「水よー！！」

エヴァンジェリンに向かって水属性の初心者魔法を使って消化した。幸い着火してすぐに消したので髪の毛が少し焦げるだけですんだ。驚いた所為か氷神の鎧は解除されていた。おかげで水をかけることが出来たのだから。多少髪の毛が焦げたとしても、ここは幻術で作られた精神だけが入れる世界。現実には問題はないのだ。

「なんだ今のはー！！」

「おう、あれは俺の作った デュアル・マジック 二重魔法という技法だぜ！」

「二重魔法……」

「まあ複合魔法の真似事だけだな」

ありえない。エヴァンジェリンはナギには聞こえない声でそう呟いた。ありえないのだ。ただの複合魔法ならいい。しかしこれは「氷と炎」という相反する、精霊同士が仲の悪い属性を混ぜ合わせるなど。精霊使いならまだしも、いや精霊使いだからこそできない魔法をナギは使った。それがエヴァンジェリンにとっては信じがたい

ことなのだ。しかし、ここで一つの仮説が生まれる。それは彼がナギに^レ関与していた可能性だ。

「ナギよ、お前はゲシュタルトにあったことはあるのか？」

「ゲシュタルト？」

「知らんのか……。まあいい、黒い髪に紅い瞳でいかにも悪役っぽい薄ら笑いを浮かべる男だ」

「薄ら笑いで悪役っぽい笑い？ うーん、あ！？ ああ、あのおっさんか！」

「おっさん？」

「そう、俺を世界一の魔法使いになるための後押しをしてくれたおっさんだ！」

「そう、そいつがゲシュタルトだよ」

「へーあのおっさんゲシュタルトって言うんだ。で？ そいつがどうかしたのか？」

「いや、なんでもない」

「？」

エヴァンジェリンは思考する。彼がナギに才能を与えたなら理解できる。この理不尽も彼の所為だと思えば理解できてしまうのだ。彼女自身も彼によって理不尽な側に向かい入れられたのだから。

「そうか、そうだ。私には一応一撃をいれたからな、仲間になってやろう！」

「おっしや！ 三人目の仲間ゲットだぜ！ これで俺の紅き翼は四^{アラルフラ}人だ！」

「詳しくは現実世界で聞こう」

「現実世界？ ああ、急にこんな場所にどうやって来たのかと思っただけど幻術かこれ」

「その通り、さあ私の目を見る」

ナギは言われるままにエヴァンジェリンの目を見る。再び紅く光りだした瞳に誘われるようにナギの意識は浮上した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9746q/>

傍“奸”者

2011年3月10日14時10分発行